新装改訂版

凡夫力（ぼんぶりょく）

社会へ飛び立つ君に伝えたいこと

松川聖業

凡夫力 ◎ 目次

プロローグ **人生の回り道**

大家族のなかで …… 2
マネから始めた自分づくり …… 6
ささやかな挑戦 …… 8
人生の転機 …… 10
一歩を踏みだす勇気 …… 14
成功の扉を開ける …… 16

I 社会へ飛び立つ君たちへ

◉人生を分けた二人の鉄道員 …… 22
二宮金次郎さんの金言 …… 24
働き方を考える …… 26

職業選択の自由 …… 28
企業が求める人材 …… 30
働く心構え …… 32
人生に目的をもて …… 34
使命感を養え …… 36
正しい人生観を養え …… 38
連帯感を養え …… 40
自分の限界を知る …… 42
使命感・人生観・連帯感の根底にあるもの …… 44
過ちを知りては必ず改めよ …… 46
◉機械との競争 …… 48

Ⅱ 伸びていく人、沈んでいく人——組織人としての黄金律

あいさつ上手は成功者の第一歩 …… 52

「しつけ三原則」で自分育て……54
誠実な人とはどんな人？……56
◉ラジオ体操で勤勉で誠実な人を見抜く？……58
組織人の栄養素「ほうれんそう」……60
チームの力……62
助け合う心を呼びさませ……64
リーダーになったなら……66
◉組織を乱すジコチューな人……68
仕事はできる人のところに集まる……70
全体を見通して考える力……72
マニュアルに使われるな……74
大事な仕事が重なったとき……76
来客への態度……78
相手の立場になってできることを……80
重要なことは直接伝える……82

酒の効用 …… 84

Ⅲ 自分を磨く

本の力（Ⅰ） …… 88
本の力（Ⅱ） …… 90
人は必ず変わる …… 92
いいことは宣言せよ …… 94
カネにならないことに情熱を燃やせ …… 96
できる人間の落とし穴 …… 98
ジコチューになりかけたら…… …… 100
掃除の力（Ⅰ） …… 102
掃除の力（Ⅱ） …… 104
整理と整頓 …… 106
気になるメッセージ …… 108

Ⅳ　チャンスを手にする人

孤独は悪いことですか？……112
ひとりを磨く……114
◉美徳は時に悪徳になる……116
大事なことは思い続ける……118
チャンスを手にする人……120
◉試練をチャンスにした若者の話……122
失敗したときの態度……126
時間の大切さ……128
成功と失敗の関係……130
◉飛ばないカモメたち……132

V 深く生きる——仏教の智慧に学ぶ

苦しみの原因 …… 136
人間であるがゆえに…… …… 138
恨みは生きる原動力にもなる …… 140
◉法然上人の発心 …… 142
正しく見る …… 144
三輪清浄 …… 146
因縁と私たち …… 148
私という存在の奇跡 …… 150
無数の先祖のいのちが今ここに …… 152
◉法然上人の偉大なる発見 …… 154
戒律の意味 …… 158
無財の七施 …… 160
◉ミャンマー修行記 …… 162

エピローグ　私の挑戦

大学の使命を果たす……168
大学での講義……170
ニーズをとらえる……172
手間を惜しまない……174
日本一の後援会……176
学生プロジェクト……178
想いに応える……180
◉自分が変わる物語が始まる……182
あとがき……184
新装改訂版に寄せて……188

プロローグ

人生の回り道

大家族のなかで

私は、東京都文京区にある智香寺（ちこうじ）という浄土宗の寺に、三人きょうだいの末っ子として生まれました。上の二人は女の子だったので、私が男であることを確認した母は「これで私の仕事は終わった」と思ったそうです。

つまり私は、この世に誕生したときから寺を継ぐ人間として期待を受けて育ったのです。聖業（せいごう）という名も僧侶を意識して付けられたようですが、成長するにつれて、「自分はこの名にふさわしい人間か、名前を汚しているのではないか」と悩んだものでした。

記憶をたどっていくと、私はつねに大家族のなかにいました。祖母と両親、子ども

三人に叔母の七人家族。それに、父の弟子のお坊さんがつねに二、三人同居していて、家のなかはいつも賑やかでした。

酒豪の父はいつも弟子たちと一緒に酒を飲んでいて、私も小学生のころから傍らに座り、なんとなく話を聞いていました。そのためか、私は、同じ年ごろの子どもと遊ぶ時間よりも大人と一緒にいる時間のほうが多く、ほかの子と比べて冷めていたかもしれません。

小学校二年生のときに東京・芝の増上寺で、出家の儀式である得度式を受けました。ところが当の私は、当時流行っていたミクロマン人形を買ってあげるからと父に言われたから得度したまでで、仏門に入ったという自覚などほとんどなかったのです。浄土宗の開祖、法然上人が九歳のときに父の非業の死によって母とも別れ、出家したことを思えば、なんとも申し訳ないことでした。

将来の夢を聞かれて、友だちが「野球選手」とか「ケーキ屋さん」とか言っているときに、私は「大臣になりたい」と言っていました。

「大臣」というのは、やがては寺を継がなければならないという、逃げられない世界のなかで見いだした言い訳のようなもの。将来の夢などというのは自分にとっては夢

物語でしかなかったのです。

家庭のなかでの父は、子どもの目には絶対権力者であり、自分が法律であるかのような存在として映っていました。まあ、男というものは案外そうありたいものかもしれません。

わが家では完全に父が主で母は従。母は父の判断のとおりに動く人に見えました。ただ、子どもの教育に関しては母任せでした。母のしつけは厳しかったのですが、おかげで、私は一般的な常識をもった大人になれたと感じています。

母は、姉たちに「高校を卒業したら洗濯は自分でやりなさい」としつけをしていました。母の本心は、女性はそのくらいできなきゃダメ、としつけたかったようですが、図らずも男である私もそうなりました。今でも汚れた足袋（たび）をたわしで洗うのは私の日課となっています。

女、女、男というきょうだい関係も、私の人格形成に少なからず影響したようです。幼いころ髪を長く伸ばしていたこともあり、私はよく女の子に間違えられました。いちばん上の姉が活発な子どもだったので、兄と妹に間違えられたこともありました。また母や姉、父の弟子たちからはつねに干渉されていたため、しだいに私は自分のこ

とを表に出さない人間になっていきました。

中学校では友だちから「セイゴウ」ではなく「ムゴウ」と呼ばれたこともありました。何か言われると、「ムッ」とした表情をしていたようなのです。嫌なことがすぐに顔に出るんですね。今はそんなことはありませんが。

高校は、都立の進学校といわれる学校に進みましたが、制服もなく、校則も自由すぎて勉強をしなかったため、授業内容についていけなくなり、だんだん成績が下がっていきました。

けっきょく高校時代は、部活にも入らず、放課後は毎日、池袋の町をぶらぶら歩いて過ごしていました。貴重な青春時代を目的もなく過ごしてしまったのです。

あるとき父に「バイクの免許を取りたい」と言ったら、即却下。普通の高校生なら、親に反対されてもこっそり免許を取るものでしょうが、私は怖くてできませんでした。

いつしか私は、自分の意志では何事も決められず、イヤだなと思うと、逃げるほうへ進んでいく人間になっていきました。今は、親の許可がないと就職を決められない学生がいるようですが、言ってみれば、私はそれを先駆けてやっていたわけです。

マネから始めた自分づくり

高校三年生になり、自分のまわりで進路のことが現実味を帯びてくると、私は、どうしたら寺を継がずにすむのかということばかりを考えるようになっていました。

浄土宗のお坊さんを目指すとなると、宗門系の大学に行くのが普通ですが、私は一般の大学を受験しました。これが当時の私にとって精いっぱいの抵抗だったのです。

一年間の浪人生活の後、大学に合格し、そこへ行きたいと言う私に対して、どういうわけか、父はそれを認めました。その代わりに出された条件が、大学在学中に「僧侶の資格を取ること」と「教員免許を取ること」でした。

二つの条件をのんで私は大学に入学しました。ようやく自我が芽生えてきたというのか、自分の人生について少しずつ考えるようになったのもこのころからです。

スキークラブに入ったら、とても上下関係の厳しい世界で、一年生のころは先輩方に「ああしろ、こうしろ」と、奴隷のごとく使われたものです。それでも辞めずに続

けられたのは酒が好きだったからかもしれません。

酒の席で、先輩に進んで酒をつぎ、飲まされ、丁寧な態度で接していくうちに、人間にはさまざまな種類の人がいること、そして言葉と態度だけで人間は判断できないことなどを学びました。

大学時代は友人にも恵まれました。そのなかに面白い人間がいて、彼はどんなに嫌なことがあっても、憎しみや恨みを込めて話すのではなく、面白おかしく不満を表現するのです。これは、聞いていても少しも不快な気持ちにならないのです。

嫌なことがあるたびに感情を貯め込んで苦しんでいた私は、事あるごとに彼を真似てみることにしました。すると、感情に左右されない自分がちゃんとそこにいるのです。これはけっこう気持ちの良いものでした。

人間は自分で自分を苦しめているのです。それに気づかせてくれた彼に心から感謝したいと思います。

若いときに、どんな人間と付き合うかはとても大事です。

「朱に交われば赤くなる」とはよく言ったもので、粗野な人間と付き合っていると、知らずしらずに自分もそうなってくるし、教養のある人間と付き合っていると自分も

感化されて、勉強するようになってくるから、不思議です。知的な関心が高まり、考える力もついてくるのです。

ささやかな挑戦

大学生活はそれまでの人生のなかでいちばん楽しく、毎日通って、よく遊びました。勉強は試験前になると励むくらいで、この国の動向や寺の将来、そして自分自身の生き方について考えることはありませんでした。

まわりが就職活動を始めるようになっても、私は動こうとしませんでした。寺を継ぐのは気が進まないが、かといって、何か明確にやりたいことがあったわけではなかったのです。

僧侶の資格と教員免許を取っていた私は、大学を卒業後、父の求めるまま寺に入りました。そして、その年の十月には、半ば強制的に住職に就任させられました。住職をしながら大学と高校の経営に携わっていた父は、私が寺に入ったら、寺のことは私

に任せて、自分は大学と高校の運営に専念したいと思っていたようなのです。

住職になると、当然ながら法事や葬儀を執り行わなければなりません。読経や法事の進行は努力して行えるようになったものの、お檀家さんや親族、関係者を前に行う法話は悩みの種でした。

父は大の話し好きで、独創的な話をするのに長けていましたが、人前で話すことが苦手な私は、絶対にこんなふうにできないと思っていました。さあ、どうしよう、困ったな、という感じでした。

法話は短くして、できるだけ避けてきた私でしたが、三年ぐらいたったあるとき、ふと、「住職である私がこんなことではいけない」という思いがわき起こってきました。そのときから、仏教の話を分かりやすく説く努力をしていくことを自分のなかで義務化したのです。

一回一回の法話は自分への挑戦のようなものでした。その家のことを知り、どんな内容の話がいいかを考えて話を組み立てて一所懸命に臨みました。それから数カ月後、今度は話にバリエーションがない自分に気づきました。そこで、だれの何回忌の法要でどういう話をしたか、きちんとノートに付けている人がいるという話を聞い

て、私も取り入れることにしました。「その話、数カ月前に聞いたな」と言われたこともありますが、できるだけ同じ人には、同じ話を二度しないように努めています。

こんな人間になりたいと思って努力を始めると、いつかはそうなるものです。時間はかかるけれど、そちらに向かって変わりだすのです。これは意志の弱かった私が言うのだから間違いありません。

苦手なことでも逃げずに続けていけば、そのうち人並み以上にできるようになります。人前で話すのが嫌いだった私も、今では平気になりました。人間、やらざるを得ない状況に追い込まれるということは、案外大事なことなのです。

人生の転機

今、日本の大学は、一部の人気大学を除いてほとんどが厳しい状況にあります。どこも生き残りをかけて努力しているものの、少子化のあおりを受けてますます厳しくなっています。時代は変わってしまったのに、これまでの経験値から抜け出せないか

らだと思います。この大学もそうでした。

私が現在、理事長を務める埼玉工業大学は、昭和五十一年（一九七六）、私の父によって設立されました。一九七〇年代の高度経済成長を経て、日本人全体が豊かになり、大学進学率が急速に伸びた、そのころです。学生は自然に集まり、経営は安泰でした。

父はいわゆるハコモノをつくることに熱心で、新しい研究棟やら図書館やら最新設備を次々に整備していきました。

しかし、投資に見合った収益が上がっていたかというと、そうではなかったようです。いつか再びいい時代が来ると信じてやまなかった父は、時代の変化に対応した次の手をなかなか打ち出すことができずにいました。

平成十一年（一九九九）五月、私は二十八歳のときに、この学園の理事となりました。月に二回ほど行われる常務理事会に出席して、学園の経営状況は把握していましたが、このままいくと近い将来経営難に陥るかもしれないと予感させるものがありました。ところが理事の方たちには危機感がさほどないように見受けられました。いや、あったけれども、いろいろなしがらみで何もできない状況だったのでしょう。

平成十八年（二〇〇六）九月、私は、経営改革を議論する理事会の席上で、「私がやっ

てもいいですか」と手を挙げました。無謀にも、改革の旗振り役を買って出たわけです。

このとき私は三十五歳、理事のほとんどが六十代、七十代、八十代の経験豊かな錚々たるメンバーです。しかし、若い私がやらねばだれがやるのだ、という確信めいたものが私のなかで生まれていました。

「では、やってみなさい」ということになったのですが、じつのところ、こんな若造に改革なんてできるのかというのが全理事のホンネだったでしょう。

このときが私にとっての転機でした。こうして私は、それまでの逃げの人生から大きく舵を切ったのです。今思うと、苦難を自ら引き受けたときが、人生最良の選択をしたときだったと言えます。

それからは、毎日約二時間かけて文京区の寺から埼玉県深谷市にある大学に通いました。寺の住職に変わりはないから、法事や年中行事などの大事な仕事は土日を中心にこなします。二足のわらじのスタートです。

腹をくくって乗りだした学校改革でしたが、壁は予想以上に厚く、本当に自分に改革ができるのかと何度思ったかしれません。

経営（財務）の改善の方法は、簡単にいえば、二つ。収益の拡大と、支出の削減で

す。収益の拡大は、確実ではあり得ません。一方、支出の削減は、机上の論理では確実に行うことができます。

本学園でも、支出削減の一案として、リストラ策が示されました。これを実現しなければ、黒字に転換できないことは明らかです。しかし私は、非常に悩みました。机上の計算だけで行って良いものか、と。そんなときに出会ったのが、『日暮硯』という書物でした。

江戸時代中期、苦境に陥っていた信州松代藩を立て直した恩田杢の事績に関する説話です。恩田杢の改革は、「人間尊重主義」「人格主義」「信頼と合意」に立脚していたといわれますが、私はそのなかのひとつ、「信頼と合意」にもとづいた大学改革を行いたいと思ったのです。

彼の財政施策は、「倹約の徹底」「新田の開発」「新しい農作物をつくる」「年貢を確実に徴収する」という当たり前すぎるものでした。しかし、そこに信頼という二文字がなければどのような立派な施策も効力はないと言っています。そして彼は、領民への信頼回復への覚悟の証しとして、自ら、妻と離縁し、息子を勘当し、親戚と絶縁し、家来を解雇することを宣言し、「一、虚言を申さず。一、平生、飯、汁以外口にせず。

一、平生、木綿着物しか着用せず」という誓いを立てて改革を断行していきます。

自己に厳しくしてこそ、改革は進むということを私は恩田杢から学んだように思います。もちろん、立て直しですから、身を切るようなことも、冷酷だと思われるようなことも決断しなければなりません。しかし私は、そんなとき、恩田杢の自らに課した覚悟を思いだしました。おかげで、人として間違った道に踏みださずにすんだと思っています。

なにしろ、嫌なことはできるだけ避けてきた私です。自ら殻を破らないと進まないということも多々ありましたが、真摯に向き合っていくうちに、しだいに、この学校のことを思い、尽力してくれる先輩方、仲間が増えてきて、五年後、ようやく黒字転換が果たせました。

一歩を踏みだす勇気

大学の理事長になって、研修や酒の席をとおして大学生と接する機会が多くなりま

した。今の若者の良いところは真面目で素直という点です。斜に構えるというような若者はあまり見受けられません。逆にいえば、元気がないということになります。それを大人たちは「頼りない」とか「幼い」とか、いろいろ言うようですが、若者は若者なりにさまざまなことを考えているものです。ただし、私も気になることがいくつかあります。

「物事をやり抜くという経験がなく、精神的に弱い」

「言いたいことがうまく伝えられない」

「一人でいることが好きなわけではないのに、人との関わりがうまくないため孤独に陥る」

つまり、根は真面目なのだけれど、失敗を恐れ、一歩を踏みだす勇気がない、ということなのかもしれません。根性がないともいえるでしょう。それは若いころの自分にも当てはまります。

就職活動になかなか腰を上げようとしない若者が増えているという点も気になります。彼らが決まって言うのが「動かなければいけないことは分かっているんですけど……」です。面接の予定を組んでも、連絡することさえ面倒くさがるのです。

頭では動かなければならないと分かっていても体が動かない。失敗する自分がイヤなのです。また、就活しても、二、三社落ちたら、もうイヤになってしまうようです。

彼女がいない二十代が増えているということも、同じです。ふられるのが怖くて自分から告白できない。最近ふられたという男子学生が「もう、リアルな女性はけっこうです」などと言っていました。女の子にふられることを恐れてゲームに逃げこんだり、一度ふられたからといって自分はもうダメだといってあきらめてしまうのはどうかと思います。そんな人が増えてしまうと、なによりも日本の将来があやうくなります。

だれでも失敗して傷つきたくはない。失敗は避けられるならば、避けたいと思う。ところが、よくよく話を聞いてみると、成功体験も失敗体験もしたことがないという場合が多いのです。挑戦しなければ道は開かれていきません。恐れずに一歩を踏みだしてほしいと心から思います。

成功の扉を開ける

逃げてきた自分。生きるということに怠けてきた自分――。私が自分のことをそう思えるようになったのは、ほんの最近です。それまでの自分を振り返ったとき、失敗はしていないけれど、成功もしていない自分に気づいたのです。そして、逃げなくてもいいことにさえ逃げてきたんだなぁと思います。なんだ平気でできることじゃないかと思うことでさえ、逃げて、避けて、やらずにきた。けっきょく勝負してこなかったのです。

今では、挑戦して失敗しても平気な自分がいます。というより、失敗したら、なんだかエネルギーが湧(わ)いてくるのです。もちろん経営そのものに失敗したら多くの人を巻きこんでしまうので慎重になりますが、今の時代は従前と同じことをやっていたのでは現状維持さえできない時代なので、新しいことに挑戦せざるを得ない。失敗を恐れていたら経営なんてできません。

昔の自分と今の自分とで何が違うかというと、今は「自分に囚(とら)われていない」自分がいます。傷ついて恥ずかしいという気持ちは微塵(みじん)もなくなりました。それに、自分が気にしていてもまわりの人はまったく気にしていなかったということは多いもので

す。

自分に囚われていると、「こんなことを言ったらだれかに文句を言われるんじゃないか」とか、「この服はみっともないと思われないか」などと、だれも気にも止めていないことを、勝手にあれこれ考えこんで、自らを縛っていたりします。自縄自縛、自意識過剰というべきでしょうか。

失敗しても、何か失っているかというと、じつは何も失っていないのです。むしろ失敗して傷ついても、そこから何かを学ぶことができれば、人生にはプラスになります。そしてなによりも、失敗によって「自分の限界」を知ることができます。自分の限界を自覚できたとき、このときこそ、道は開かれていくのです。

あるがままの自分、力の足りない自分を自覚し、【凡夫の自覚】
そのうえで、数あるもののなかから自分のなすべきことを見つけ、【選択】
謙虚に、そしてひたむきに努力すること。【専修】

このことを私は「凡夫力」と名付けてみました。

凡夫力を身につければ、あなたは、まわりの人たちから愛されるでしょう。そして、世のため人のためにがんばることができるはずです。そのことが、きっとあなたの人生を豊かで幸せなものへと導いてくれると私は信じています。

若い人々の掌（てのひら）には未来が預けられています。深く、広く生きるのも、浅く、狭く生きるのも、自分しだいです。出身大学や成績の良し悪しとはあまり関係がありません。それは過去のモノサシ。これからの時代は、人間力、そして凡夫力がものを言う時代。そんな時代に社会に出ていく若者たちに、人生の半ばまで回り道をしてきた私が、その経験を踏まえて、心を込めてメッセージを贈ります。

I

社会へ飛び立つ君たちへ

◆ 人生を分けた二人の鉄道員 ◆

こんな話を聞いたことがあります。

アメリカの、とある鉄道会社に二人の社員が入り、鉄道作業員として一緒に働き始めました。約十年後、一人は社長となり、もう一人はあいかわらず同じ仕事をしていました。社長になった元同僚が線路の修繕（しゅうぜん）をしている現場の視察に出かけたとき、一人の作業員が近づいてきました。見れば、かつての同僚です。彼はこう語りかけます。

「君はずいぶん出世したね。君が社長になったときは驚いたよ。十年前はお互い五十ドルの日給を得るために働いていたのにね」

すると、社長は言います。

「そうだったのか。君は五十ドルをもらうために働いていたのか。私は十年前も今も、この鉄道会社のために、そして、世の中の人たちに快適な移動や旅をしてもらうために働いているんだ」

この二人、スタート地点では同じ所にいたのです。ところが一方は、仕事を通して

人々のお役に立つために、もう一方は日々のサラリーを得るためだけに働いた。この話は、働く意識によって進む方向がまったく違ってくることを教えてくれます。仕事の向こうに何を見るのか、それによって十年後のあなたの人生は違ってくるということです。

ここで、生きるためにカネを得るのは悪いことなのかと疑問に思う人もいるかもしれません。もちろん悪いことではないし、生きていくうえで必要なことです。しかし、カネだけしか見ていないのか、カネを得るために働いてはいるけれど、仕事を通して自分に何ができるのかという意識をもち、工夫をし続けているのかによって、人生はまったく違ってきます。

仕事はカネを得るためだけのもの、と割り切る生き方もあるでしょうが、それだけでは仕事に情熱がわいてきません。仕事が好きでいい仕事をしたいという情熱をもっているからこそ、お客さんに喜んでもらえる仕事ができるし、誇りをもつことができるのです。こういう人は、自分の仕事に感謝できるし、ひいては自分自身に感謝できる人です。自分も幸せになるし、まわりも幸せにできる人です。

二宮金次郎さんの金言

働くとは、傍(はた)を楽(らく)にすることである。

働くとは、傍を楽にすること――。

これは、二宮金次郎こと、二宮尊徳（一七八七～一八五六）の言葉だとされています。二宮金次郎といえば、薪を背負って歩きながら『大学』を読む姿が有名ですが、かつては小学校の校庭にはどこでもその像がありました。

子どものころに両親を失った尊徳は、災害で没落した家を、若くして独力で再興します。やがて小田原藩に登用され、困窮した村を次々と再建し、それは東北から九州に影響を及ぼしました。そして、自分の利益や幸福を追求するだけの生活から、この世のすべてに感謝し、それに報いる行動を取ることが大切だと説きました。

「傍を楽にすることが働くこと」とは言葉遊びのようですが、これは日本人の仕事観を言い得て、私は大好きな言葉です。自分が働くのは、まわりの人を幸せにすることにつながるし、こういう気持ちで働けば、仕事も楽しくなってきます。

仕事はおカネを稼ぐ手段の一つには違いないのですが、それは自分の成長のための機会。傍を楽にすれば、当然まわりの人々から感謝されるし、必要とされる喜びもわいてくるものです。

世の中に楽な仕事は一つもない。

「楽をして稼ぎたい」「働かなくても生きていけるなら、働きたくない」

こんな声を聞くことがたまにあります。しかし、残念ながら、楽をして稼ぐことも、働かないで生きていくことも、非常に難しいでしょう。

日本人の働き方は、効率が悪い、生産性が低いと言われていますが、仮にそれを改善したとしても、楽して稼ぐことにはなりません。むしろ、これからの時代は、もっとレベルの高い仕事を要求されるようになるのでないでしょうか。

大学を卒業さえすれば、どこかしらに就職できる、という良い時代はすでに過去のものです。今は、自分自身の力で、就職を勝ち取らなければなりません。その上を行くなら、自分で起業するという選択肢もあるでしょう。ＩＴ技術が発達したお陰で、パソコン一つあればどこででも仕事ができるという時代になりつつあります。東京から遠く離れた田舎町に引っ越して一人で起業して、空気も水も澄んでいる清々しい場所で、クリエイティブな仕事をするという人たちも多数出てきています。

「働く」ということを「雇用される」ではなく「自分の仕事をする」という視点で考えると、楽な仕事が良い、などという考え方は払拭されるかもしれませんね。

どういう職業につくのか。
それは、ほかのだれでもない、
あなた自身が決めることだ。

「職業選択の自由」が憲法で保障されているからといって、どんな職業にでも自由につけるわけではありません。仕事の内容によっては、資格がいる場合が多々あります。当然資格を取るための勉強をして資格を取得しなければ、その仕事にはつけません。

皆さんのなかには、実家が家業を営んでいる人も多いでしょう。家業を継ぐのか、それとも別の仕事につくのか、迷っている方も多いかもしれません。私は実家が浄土宗の寺院でした。子ども心に、跡は継ぎたくないな、と思っていました。しかし現在は、跡をついだお坊さんというものが板についてきました。また学園の理事長という職も、前理事長である父から引き継いでいます。結局、自分がやりたくないと考えていたものを二つともやる羽目になりました。今は、それが失敗だったとは思っていません。つらいこともありますが、今の立場だからこそ得られている経験もたくさんあります。けっきょくは自分で選んだ道なのです。

皆さんもどの仕事につくのか、自分自身で決めてください。そしてそのことに責任をもってください。選んだ仕事の良し悪しは、ずっと後になって分かる日が来ます。

君を採用して良かったよ、と言われる
人間を目指せ。

私の仕事の一つに、企業訪問があります。学生の就職のお願いに上がるのです。年間に何十社もの社長さんとお話しして、聞こえてくるのは、こんな本音です。

「若者は就職難の時代だと言って嘆くけれど、会社を経営する立場からしたら、採用難、求人難の時代ですよ」と。本当に欲しい人材はなかなかいないと、経営者たちは嘆いているのです。

私は今、大学と高校の理事長として学校経営を、また住職として寺の経営に携わっています。学校は多くの職員を雇う大規模の経営、一方の寺は掃除から葬式・法事、檀家さんのお世話まで、すべて家族だけでやらなければならない非常に小規模の経営です。

いろいろな業種がありますが、すべての経営者に共通して求められることに「事業の継続性」があります。そのために必要な人材は、①基礎的な学力を有していること、②人柄が良いこと、③仕事に対する情熱をもっている人、などいろんな視点で見られますが、要は、一緒に仕事を始めた後に、「君を採用して良かったよ」と思われるかどうかです。

○○しかできません。△△はやりたくないです。
こういう人には、いい仕事は回ってこない。

私は採用を決めるための最終面接時に、ズバリ、「どんな仕事でもやりますか？『二十四時間戦えます』くらいの情熱をもってやってもらえますか？」と聞くことにしています。このときどんな答えが返ってくるかによって、情熱をもって仕事に取り組んでくれる人なのか、失敗を恐れずにチャレンジできる人なのかを見極めています。

転勤のある仕事はイヤだ、自宅から通える会社が良い、海外転勤なんてあり得ない、という若者が増えていると聞きますが、それでは、日本は世界から取り残されてしまいます。グローバル化が進んでいる現在、日本の若者には、何にでも積極的にチャレンジしてほしい。

一歩前に踏みだすのは怖いし、失敗するのもイヤだという気持ちは分かります。かつての私もそうでしたから。しかし、現在の社会情勢のなかで、「これをやるのはイヤです」「苦手です」などと子どものようなことを言っていたら、仕事は回ってこなくなります。自分が苦手としている仕事も、じつは食わず嫌いである場合が多いもの。自分でも知らなかった隠れた能力を呼び覚ますチャンスととらえて、どんなことにでも挑戦してみましょう。

「就職できました」
それは目的の達成ではなく、目標の達成という。
目的は、人生を通して何をやるか、だ。

「目的」と「目標」の違い、分かりますか？

「目的」とは、最終的に到達すべきもの、願い、と言っても良いかもしれません。そして「目標」は、その目的に到達するまでの途中にある具体的な地点を示します。

あなたが「世界中の子どもたちに笑顔を届けたい」という目的をもっていたとします。その目的を達成するためには、いろいろなアプローチがあります。漫画家になる、マジシャンになる、お笑い芸人になる、学校の先生になるという選択肢もあるでしょう。ほかにもたくさん、皆さんなら考えられるはずです。これは目標です。

また、有名企業に就職すること、弁護士になること、医者になること、研究者になること、これらも「目的」ではなく、途中の「目標」にすぎません。もし、有名企業に入ることが人生の目的なら、それがかなった時点で、もうあなたの進歩は止まってしまうでしょう。そうではなく、その会社に入って、自分は何をなすべきなのか、を考えておく必要があります。

人生に目的をもってください。そして、その目的は、到底かなえられないだろうと思うくらいの大きな目的のほうが良いのです。

自分自身の力を「誰かのために」使うことのできる人間になれ。

私が理事長を務める埼玉工業大学の建学の精神は三つの柱になっており、一言でいえば、「使命感、正しい人生観、連帯感を養え」ということになります。一つ目の「使命感を養え」には、自分で学び、身につけた力を「誰かのために」使うことのできる大人になってほしい、という願いが込められています。

皆さんは、小学校・中学校・高校そして大学、と勉強を続けてきました。自分自身の教養を高め、より豊かな人生を歩むために、学ぶことは重要なことです。しかし、学んで身につけた力を、自分自身のためだけに使うのでは、少し寂しい気がします。

大学の所在地である深谷市は、渋沢栄一（一八四〇～一九三一）の出身地です。実業家として、多種多様な企業の設立に関わり、その数は五百社を超えると言われていますが、その彼が、晩年、力を注いだのが、社会・教育・文化事業です。大学や病院の設立などの社会事業に大きく貢献しました。これは、一人でも多くの人に、教育や医療のサービスを受けられるようにして、幸せになってもらいたいと願っていたからにほかなりません。皆さんにも、渋沢栄一に負けないくらい大きな使命感をもって、活躍してもらいたいものです。

常に「正しい選択を」することが
できる人間になれ。

人生観は、人それぞれに違います。各々（おのおの）の価値観が違うからです。だからこそ自分自身の頭で考え、判断し、そして「正しい選択を」できるようになってほしいのです。

われわれの人生は、常に選択の連続といえます。「どこの高校に入学するか」「どの大学に行ってさらに学問を深めるか」「いや勉強はもう良いから社会に出て働くか」「じゃあどこの会社で働くか」「何歳で結婚するか」「だれと結婚するか」「どこに住むか」という重大なことから、「今晩の夕食は何にするか」「テレビはどの番組を見るか」「何時に寝るか」など日常のことまで、自分で何となく過ごしているように見えても、すべては自分自身の選択にかかってきます。その選択の一つひとつが自分を作り上げているということを知る必要があります。そして、自分の人生を正しい方向に導くためには、日ごろから学ぶことが必要です。

現在は、科学技術が著しく発達していますが、そのスピードに人間の心が追いついていないとも言われています。どんなに優れた技術でも、それを使う人間が正しい道徳観・倫理観・宗教観をもっていなければ、それを世のため人のために使うことはできません。自分自身で、常に、正しい選択ができる人間になってください。

「みんなとともに」力をあわせて、
行動できる人間になれ。

「連帯感を養え」とは、自分のまわりにいる「みんなとともに」力をあわせて行動できる人間になってほしい、という願いが込められています。

皆さんは、今、自分一人の力だけで生きている、と言えますか？　もし、そうであるなら、一度、自分を見つめてみてください。

着る服、食べるもの、住む家、衣食住のどれを取っても、人の手の介在していないものはありません。実際にモノをつくってくれる人、モノを運んでくれる人、モノを売ってくれる人と、われわれの見えないところでも多くの人との関わりがあります。そのことに気づけば、人間は決して一人では生きていけない、ということが理解できるはずです。またこれは、われわれはつねにまわりのだれかに迷惑をかけているということでもあります。そのことを理解し、そして、まわりの人たちと協調し、力を合わせて生きていくことの大切さを知ってください。

また、どんなに優れている人でも、一人でできることには限界があります。より大きなことを成し遂げようとしたら、他者の力が必要になるし、みんなで力を合わせて完成したものは喜びが大きいものです。

本当に努力した人だけが、
本当のあなたに出会うことができる。

皆さんは、何か一つでも、「これだけはだれにも負けないくらい死ぬほど努力した」という経験がありますか？　もしあるならば、自分の限界を知り、自分のいたらなさ、足りなさを知ることができるでしょう。そこに謙虚な心が生まれ、自分が何をすべきか見えてくるはずです。もし中途半端な努力しかしたことがなければ、自分の力を正しく知ることができません。

自分のいたらなさ、愚かさを見極めることを「凡夫の自覚」と言います。これは、劣等感をもつこととはまったく違います。

米アップルの創業者、スティーブ・ジョブズは「ハングリーであれ、愚かであれ」と言いました。多くのものを吸収し成長するためには謙虚な姿勢で、どん欲に取り組むべきです。そうすることで、開かれてくる世界が確かにあることを彼も教えているのだと思います。

だれにも負けないくらいの努力をしてみよう。そうすれば、本当のあなた自身に出会うことができます。

凡夫の自覚が、あなたを強くしてくれる。

理事長という仕事は、決して楽な仕事ではありません。私自身、非力を顧みずに大学の経営改革に手を挙げたのは、学生生徒の皆さんの勉学の機会を奪うわけにはいかない、教職員を守らねばならない、という強い使命感があったからです。これがあったから、自分の殻を破って改革を推進できたし、逃げの人生から大きく転換できたのです。そして今も、自分のやるべきこととそうでないことを峻別（しゅんべつ）し、まわりの人たちと協力し合い、助け合いながら日々の学校運営にあたっています。

・私は精神的に強い人間ではない。

だから「誰かのために」という大義名分（強い動機付け）が必要である。

・私はあれもこれもすべてできる能力の高い人間ではない。

だから自分が今、何をすべきか「正しい選択を」する必要がある。

・私は、一人で何かをつくり上げることのできる人間ではない。

だから「みんなとともに」働く必要がある。

凡夫の自覚とは自分のいたらなさ、愚かさを見極めるということ。力の足りない自分を自覚することで、自分のなすべきことが見えてきます。

過ちを知りては必ず改めよ

間違いを認め、改めるのには勇気がいる。

知過必改（ちかひつかい）――。

理事長室に掲げてある言葉です。平成十九年（二〇〇七）、学園の理事長に就任するにあたり、私の書道の先生にお願いして書いていただいたものです。書道の手本として有名な「千字文（せんじもん）」に出てくる言葉です。

人は、だれしも間違いや失敗をするものです。しかし、それを認め、改めるのには勇気が必要です。大人になればなるほど、社会的に身分が高くなればなるほど、自分の過ち（あやま）を認めるのが難しくなるようです。確かに間違いや失敗は、ないほうが良い。格好悪くもあるでしょう。しかしその過ちを隠すために、さらに嘘（うそ）を塗り固めるようになったら最悪です。場合によっては、取り返しのつかないことになります。最近、世間を騒がせている企業の不祥事なども、最初のミスを隠すために、嘘を積み重ね、その揚げ句、損害を大きくしてしまっています。

過ちだったと気づいたならば、すぐにそれを改めるべきです。過ちを認めるのは、格好悪いことではありません。それを隠し、嘘をつくことのほうが、ずっと格好悪く罪が重いのです。そんな大人には、ならないでください。

◆機械との競争◆

『機械との競争』（エリック・ブラインジョルフソン＋アンドリュー・マカフィー著、村井章子訳、日経ＢＰ社）を読んで非常に考えさせられました。

過去に、農業では馬を使って畑を耕していたが、トラクターを使うようになって、馬の役割が減っていき、最終的にはまったく馬を使わなくなってしまった。それと同様のことが今、加速度的に起こってきていると警鐘を鳴らしています。

予想を超えるコンピュータの進化により、従来、人間にしかできないと思われていた多くのことをコンピュータがこなせるようになってきています。絶対不可能と言われていた車の自動運転化も、そう遠くない将来に実現されるでしょう。

これらの技術革新により、われわれの生活は、ますます便利で快適なものになっていきます。しかし、その一方で、われわれ人間が担っていた仕事が、機械に取って代わられるという現象が起きています。そういう現状の中で生きていかなければいけないことを認識し、機械やコンピュータをうまく利用して、新しい技術やサービスなど

を作り出すという気概を一人一人がもって、強く生きていくことが、これからは求められる時代になるでしょう。

ＡＩ（人工知能）などの研究を行っている、オックスフォード大学のマイケル・Ａ・オズボーン准教授が二〇一三年九月に発表した論文「THE FUTURE OF EMPLOYMENT」（雇用の未来）も世界に衝撃を走らせました。今後十～二十年で、アメリカの雇用者総数の約四七％の人の仕事が、機械やコンピュータに取って代わられるだろうと予測をしたのです。七〇二の業種を徹底調査して、この結論に至ったそうです。代替されると挙げられたものの中には、高度に専門的な職種と思われるものも入っており、非常に驚きました。

そういえば、私が子どものころには、電車に乗る時は、切符を買って、改札で駅員さんに切符を切ってもらって駅構内に入っていましたが、今は、自動改札機にＳＵＩＣＡなどのＩＣ乗車カードをタッチして入る、という形に代わっていますね。思えば、すごい技術の進歩です。

これからは、創造性を持った仕事や、新たな価値の創出が求められる時代になっていくのでしょう。自分達がその役割を担っていくんだ、という意識をぜひ学生の皆さ

んにもってもらいたいのです。もちろん、そのためには、多くのことを学ぶ必要があるということを、どうかお忘れなく。

Ⅱ

伸びていく人、沈んでいく人

――組織人としての黄金律

あいさつ上手は成功者の第一歩

明るく元気にあいさつができる人は、
成功の第一歩を踏みだしたも同然だ。

社会人としての基礎の基礎、それは、あいさつです。これは人間としての基本でもあります。「なんだ、当たり前じゃないか。子どものころからやってるよ」という人。あなたは社会人の第一歩を無事に踏みだすでしょう。

しかし、明るく元気に、きちんとあいさつのできる人は意外と少ないもの。あいさつができるかどうかで、長い社会人としての人生を決定づけると言っていいくらいです。あいさつは、人との信頼を築き、継続させるための黄金律なのです。

あいさつをする習慣がなかった人は、最初が肝心。まずは恥ずかしい自分を横に置いて、舞台で演じるような気持ちで、元気よくやってしまうのです。最初のうちはぎこちないかもしれませんが、徐々に慣れてきて、自然にできるようになります。

次に重要なのが、あいさつされたら、相手のほうを向いて元気に返すこと。あいさつしたほうはどんな返事が戻ってくるか、じつはとても気にしているものです。

なかには、明るくあいさつしても、まったく返事を返さない人がいます。これが何度も続くと、あいさつするのがバカらしくなってくるでしょう。でも、そのときあなたならどうするか。ここが、これから伸びる人、沈んでいく人の分かれ道です。

あいさつ、ハイの返事、
ものごとの始末をきちんとする。
伸びる人はみんなこれができている。

偉大な教育実践家であり哲学者に森信三（一八九六～一九九二）という人がいます。「あいさつ」「ハイの返事」「はきものをそろえる」の三つを「しつけ三原則」として、その励行を呼びかけました。今、「しつけ三原則」を社員教育に取り入れる企業が増えています。なぜかというと、子どものころに身につけておくべきしつけが社会人になってもできていない社員がたくさんいるからです。

あいさつは自分からの投げかけですが、ハイの返事は相手を受けいれる行動です。「○○さん」「○○くん」と呼ばれたら、歯切れ良く「ハイ！」と返事ができる人間になる。どんなに仕事ができる人でも、これぐらいができないのであれば、社会人生活という前に、成人として危ういかもしれません。

ちなみに「はきものをそろえる」は、企業では「ものごとの始末をきちんとする」とか「環境整備を徹底する」などと置き換えていますが、簡単にいえば、お手洗いや台所を使ったとき、洗面台やシンクに飛び散った水をサッと拭くとか、手ぬぐいがクチャクチャになっていたらピンと伸ばして整えて出るとか、自分の後に使う人が気持ちよく使えるようにする、他人を思いやる心がけを大事にしなさいということです。

誠実な人とはどんな人？

明るく元気にあいさつもできるのに
信用されない人。
それは誠実さに欠けた人だ。

明るく元気で、返事やあいさつもできるのに、不誠実といわれてしまう人がいます。組織に忠実という顔をしているが、仕事の中身を見てみると、やるべきことに責任をもってやっていない。こういう人は組織にとって混乱の元です。できもしない目標を掲げて、「死守します！」などと言う。でも、社会ではこんな軽薄なパフォーマンスは通用しません。周囲の人の目にはその人のごまかしがはっきり見えているのです。

『観無量寿経』というお経に「至誠心」という言葉が出てきます。

至誠心とは、うそ偽りのない誠の心のことで、誠実と同じと考えていいでしょう。

さて、至誠心をもった人とは、次のうちのどれでしょう。

①誠実な態度（外面）で、中身（内面）も誠実。

②誠実な態度だが、中身は誠実でない。

③態度は悪いが、中身は誠実。

④態度も、中身も誠実でない。

至誠心をもった人は①の人です。態度と心は一致しなければダメです。②のような人は面従腹背といってだれからも軽蔑されてしまいます。さて、あなたは何番ですか？

◆ラジオ体操で勤勉で誠実な人を見抜く？◆

ソニーの元会長・出井伸之さんが、欲しい人材は？　と質問され、「少数の天才と、多数の勤勉な人」と言ったそうです。これを聞いて、意外に思ったのは私一人ではないでしょう。

ソニーといえば、ウォークマンやトリニトロン方式のテレビなどユニークな製品を次々と打ち出してきたＡＶ機器分野の世界最大手、エレクトロニクス系企業のなかで世界屈指のブランドイメージを築きあげた企業。ずいぶん長い間、就職の人気ランキングのトップを独占していました。

競合他社に先んじた開発が社運を決めるソニーにして求める社員を「勤勉」というぐらいですから、ほとんどの会社が求めるのは「勤勉」な社員といって過言ではないでしょう。

さて、この「勤勉」な社員を見抜く方法があるのだそうです。

埼玉工業大学のある深谷市は黒胡椒（こしょう）せんべいの発祥の地です。これを流行らせた製

菓会社の社長さんに、「どんな人材が欲しいですか？」と聞いてみると、即座に、「勤勉、まじめ、誠実」と返ってきました。そして、「それを判断するいい方法があるんですよ」と、自信ありげにおっしゃるのです。

「何ですか？　ぜひ教えてください」と、身を乗りだすと、

「それがねぇ、ラジオ体操をさせるんですよ」と、意外なことをおっしゃいました。

「ちゃんと手を伸ばしてやっているかどうかを見れば、一発で見抜けるもんですよ。ラジオ体操をやれと言われて、これに何の意味があるの？　とか思っている人は、いい加減な動きしかしない。意味があるかどうかは分からないが、とにかくちゃんとやろうと思ってやっている人は、じつは仕事の姿勢も勤勉、まじめ、誠実なんですよ」

なるほどと思い、私もある朝、大学で職員にいきなり「これからラジオ体操をやります」と言ってみました。みんな、ちゃんとやっていたので、逆に私の手が伸びているか心配になったほどです。

ほうれんそうは体にいいだけでなく、
組織人としての必須アイテムだ。

社会人になったら意識したいのが、「ほうれんそう」。

ホウレンソウは体にいいけれど、こちらは社会人としての必須アイテムです。「ほう」は報告、「れん」は連絡、「そう」は相談、つまり、報告・連絡・相談です。

これは今から三十年も前に、山種証券の社長だった山崎富治氏が提唱したものです。社内コミュニケーションに不可欠なものとして「ほうれんそう運動」を始め、今ではビジネスの基本として多くの会社が取り入れています。

会社の仕事は個人プレーではなく、会社の目的に向かって全社員がそれぞれの持ち場で責任を果たしていくものです。そのときリーダーが、だれが、どのように仕事を進めているのか、何か問題が起きていないかをきちんと把握できないと、状況判断も決断も下すことができません。

仕事を遂行するうえで、予定どおりにいかないときや判断に迷うときは抱えこまずに上司に相談する。面倒でもやっていくと、解決の糸口やアイデアが生まれ、仕事がスムーズに運ぶし、なによりも自分が楽になります。相談は、頼ることでも甘えることでもなく、建設的なことなのです。「ほうれんそう」は、会社を健康にします。

チームの力

一人でできることには限界がある。
大勢の力を結集させれば大きいことができ、
喜びも大きくなる。

社会に出て、組織の一員となると、チームで働く力が問われてきます。これは、組織人として必要不可欠な能力です。

これを身につけるには、サークルでも部活でもボランティアでも何でもよいので、いろんな人とともに何かをやる経験を積んでおくことです。たとえば、飲み会を行うことでも海や山に遊びに行くことでもいいのです。みんなで一つのことを行う。目標があって組織的に動くことによって、チーム力が備わってきます。

一人でできないことでも、チームが力を合わせれば、できるようになります。たとえば、百キログラムの石を一人で持ち上げようとしても無理です。また五人で、一人ずつ順番に持ち上げようとしても無理ですが、五人で一斉に力を合わせて持ち上げれば、容易に上がります。一人では無理でも、五人で力を合わせたらできる。一人ひとりの負担は二十キログラムかもしれません。しかし一人で二十キログラムの石を持ち上げることとは違います。五人一緒にやるから百キログラムの石が持ち上がるのです。

一人ではなく、みんなと一緒にやるから大きな力を発揮できる。と同時に、喜びも大きくなるのです。

助け合う心を呼びさませ

自分の足りない部分を助けてもらい、
他者の足りない部分を助ける。それがチームだ。

日本人は本来、全体のなかで自分がどういう位置にあり、どう動くべきかを感じ取る能力が鋭いといわれます。これは長い間、農業や漁業、林業を生業（なりわい）としてきた日本人が自ら獲得した貴重な能力です。私たちの祖先は助け合いながら生きてきたのです。また、助け合わなければ、生きていけなかったともいうことができます。

人にはそれぞれ得意なこと、苦手なことがあります。場の雰囲気を和（なご）ませ、まわりを癒（いや）してくれる人。みんなをやる気にさせ、組織を動かす人。間違った方向に進みそうなときに、勇気をもって間違いを指摘してくれる人。目立たないけどコツコツと勤勉に仕事をこなしてくれる人。いざというときに身を挺（てい）してみんなを護（まも）ってくれる人。それぞれの良いところを生かし、足りない部分を補い合う。それによって一人ではできないことでも、成し遂げることができます。

現在の社会構造は、自分に足りないもの、自分にできないことをおカネを介して補い合っています。魚を食べたいけど自分で釣りに行くのは難しい、だから魚屋さんで買おう。野菜を自分でつくるのは大変だ、だから八百屋さんで買おう、と。そう考えると、社会全体が助け合っているということができます。

部下のやる気を出させることが
リーダーの最大の仕事だ。

組織とは面白いもので、だれをリーダーに据えるかによって、その部署の働きが全然違ってきます。人的環境が変わると、人は変わるのだとつくづく思います。

むかし、中国の蘇洵（そじゅん）という人は、「一国は一人を以（も）って興（おこ）り、一人を以って亡（ほろ）ぶ」と言ったそうですが、一人のリーダーの存在が国さえも左右するということです。

だから、良いリーダーが必要です。その良いリーダーとは、進むべき方向を示し、組織のメンバーのことを思い、彼らに良い仕事をしてもらうために心を配り、メンバーそれぞれの良いところを伸ばし、悪いところを改善することのできる人。そして、何よりもメンバーのやる気を出させることのできる人。また、怒るときには、感情で怒るのではなく、きちんと叱（しか）れる人です。部下をガツンと叱った後に、「おい、飲みに行こうか」と誘える人、部下を大事にして面倒見のよい、太っ腹な人でしょうか。

逆に、感情で怒るようなリーダーの元では、部下は素直に反省することができません。感情をぶつけるのと引き替えに、溜飲（りゅういん）を下げていることを見抜いているからです。そんなリーダーは、自分は「支配」と「所有」の欲求の強い、執着の強い人間であることを反省し、組織における自分の役割に徹するよう努力をすべきです。

◆組織を乱すジコチューな人◆

能力が高く、優秀なのに人から嫌われる人って、世の中にけっこういるようです。それは、とても損なこと。なぜここでみんなが興ざめするようなことを言うの？　というようなことを平気でやるのです。こういう人はなにごとも自己中心的で、自分のところに運やツキが回ってきても、それに気づけません。そしてだんだんと孤立していって、寂しい人生を歩むことになってしまいます。人と一緒に何かやろう、自分のまわりに人が来てほしいと思ったら、人から愛される人間にならなければなりません。

私の知り合いに、能力は高いし、行動力もあるのに、口が悪く、集まってきた仲間の気持ちを逆撫でして、わざわざやる気をなくさせる人がいました。いい意見を出すのだけど言い方が悪いのですよね。

また、世の中にはやたらと人の問題点を衝いてくる人がいます。問題を指摘する際には理路整然として鋭いのに、問題を指摘された側の気持ちなど考えていないから、せっかくの指摘もかえってマイナス方向に働く。おそらく指摘した目的が改善にある

のではなく、自分はどれだけ優れた人間かという自己顕示のほうにあるからでしょう。

こういう人は、チャンスを自らの性格で潰してしまいます。こういう人がいないほうが、組織はまとまるでしょう。

しかし人が集まるということは面白いもので、一人の問題児が去ると、やがて新たな問題児が現れるようです。よく言われるのが、二対六対二の法則です。

アリの組織は、すべてのアリが一所懸命働いているわけではなく、二割の一所懸命に働くアリ、六割の普通に働くアリ、二割の怠け者のアリに分かれるそうです。そのうちの二割の怠け者を排除すると、今度は残りの八割のなかから新たに怠け者が現れるそうです。この法則は、われわれ人間の社会、どこの組織でも当てはまるとのこと。組織やグループにはそういうものがつきまとうもの。そのなかで、自分はどう振る舞うのか、人間力が問われるところです。ちなみに、二割の怠け者のアリも「イザ」というときには、積極的に動くらしいですが。

人間関係は難しいものです。これは人生の最大の難題かもしれません。学ぶべきものを学んだ後は自分の人間力をいかに伸ばすかが大事だと思います。

コピーひとつ、
名指しでものを頼まれるようになったら
信頼されている証拠。喜んで受けとめよう。

仕事も「気持ちよく仕事のできる人」のところに集まってきます。仕事がきちんとできなかったり、イヤイヤやる人は仕事のほうから毛嫌いされます。

頼まれた人は、ハイとほほえんで、すぐにやる。また、仕事の期限を聞いて、難しいと思ったら、「〇〇の後でよろしいですか？」「これはできますが、時間をください」というように、早めに伝えることです。

いずれにしても、名指しでものを頼まれるようになったら信頼されている証拠です。

入社して数年は、「これコピーをしておいて」とか、一見、だれでもいいような仕事が来るかもしれません。このとき、「またか、面倒くさいな」ではなく、「またお願いされちゃった、嬉しい！」と受けとめることができれば、仕事に工夫が出てきます。コピーの取り方ひとつに、できる人間かどうかが現れるもの。コピー機の特性を知って効率よく取る。コピー漏れがないか確認する。会議用の複数の資料ならば、クリップで留めることも必要だろうし、いろいろと工夫がいるものなのです。

こうした隙のない真面目な姿勢を続けていけば、そのうち、「君じゃなければダメだ」となっていきます。こうなったらしめたものです。

仕事の向上には、全体を見る目と、
そのなかで自分がなすべきことは何か、
を知ることが必要だ。

あなたが技術系の仕事について自動車の部品の一つをつくることを任されたとします。あなたは精度の高い部品をつくろうと頑張るでしょう。しかし、何百とある部品の一つだけ精度の高いものをつくっても意味がないのです。それは、みんなで軽自動車をつくっているのに、一人だけポルシェのエンジンをつくるようなものです。あなたがやるべきことは、軽自動車に最も合うエンジンをつくること。それが全体を生かすことになるわけです。

自分がつくろうとする自動車はどういうもので、自分はどういう部品をつくるべきなのか、それが分かってはじめて、創意と工夫が発揮でき、自分の仕事も全(まつと)うできます。

つまり創意と工夫には「全体を生かす心」が必要になってきます。その全体を生かすためには、まず全体をよく見て、概要をつかみ、そのうえで、自分がやるべきことは何か、を把握することが重要です。

全体に対する視点があってこそ、部分が生きてくる。若いと、なかなか全体が見えないから、特に注意が必要です。

マニュアルに使われるな

マニュアルに使われてはならない。
使う人間にならなければ、
あなたはロボットと同じだ。

ある有名バーガーチェーン店に行って、ハンバーガーを三十個と頼んだところ、「お持ち帰りですか？　それとも店内でお召し上がりになりますか？」とマニュアル通りに聞かれました。「三十個も一人で食べるわけないでしょ」と、皮肉の一つでも言ってみたくなりました。マニュアルの弊害ともいえますが、要はマニュアルが最優先で、「考えるべき人間」がまったく考えていないのです。これでは人間ではなく、ロボットです。この場合なら、「お持ち帰りでよろしいですね？」と聞くべきでしょう。

このようなことに気がつかない人は、そんな自分の鈍感さを自覚していません。自覚していないどころか「会社からマニュアルどおりにやれと言われているのに、何が悪いんですか」というくらいのものです。お客様に「君は何を考えているんだ！」などと怒鳴（どな）られたり、指摘されたりして、何も考えていない鈍感な人間だと気づくのです。

逆に、気づく人というのは、マニュアルを使ってでも自分の仕事の意味を理解し、相手の立場に立ちながら「創意工夫」のできる人です。

マニュアルに使われるな、使いこなせ、といわれるのはそういうことなのです。

大事な仕事が重なってしまったら、
緊急度と重要度から優先順位を判断する。

仕事のできる人は、自分のやる仕事の優先順位を十分に理解しています。その優先順位は緊急度と重要度ではかることができます。①緊急で重要なもの、②緊急ではないが重要なもの、③緊急だが重要でない、④緊急でも重要でもない、に分けることができるでしょう。

当然、第一優先は①で、④は後回しということはだれでも分かりますね。では、②の緊急ではないが重要と、③緊急だが重要でないものでは、どちらを優先させるべきでしょうか？

実際には、多くの人が緊急だが重要でないものを優先しているのではないでしょうか。しかし、本当は緊急でないけれど重要なものを優先し、もう一方はだれかほかの人に任せるべきなのです。ただし、これは自分の立場によって変わります。新入社員であれば、緊急の対応をするよう上司から指示され、重要な案件は上司が受け持つ、という場合が多いでしょう。未熟な組織では、全員が目先のことに振り回されて、組織の将来や長期目標を見ている人がいないということが起きがちです。

何を優先すべきなのか、これは私も、つねに自分自身に問うていることです。

お茶出しひとつに心が表れる。
プラス、臨機応変の心配りも必要だ。

会社で上司から、お客様にお茶を出してほしいと言われたとします。

「えーっ、忙しいのに」とか「面倒くさいな」と思っていると、それがそのままお客様にも伝わってしまいます。一方、「遠くからお出でいただき、さぞお疲れでしょう。この一服をお召し上がりください」という気持ちでお出しすると、言葉を交わさなくとも、態度やしぐさを通してあたたかい気持ちが伝わっていきます。お茶一杯で会社のイメージを左右しかねないのですから、経営者にとっては一大事なのです。

お待ちになっているお客様に対しては、「いらっしゃいませ」と明るくあいさつをし、「失礼します」と言って、お客様の右手側に静かにお茶を置く。そして、お盆を脇に抱えて「もうしばらくお待ちくださいませ」と一礼して部屋を出る。これが基本。しかし、すでに打ち合わせや商談に入っているときに、声を出してあいさつをしていたら、話を中断させることになってしまいます。こんなときは、場の空気を読んで、小さな声にするか軽く会釈して、そっとお茶をお出しするのです。また、どんなに心をこめていても、お茶を置くときに音を立てると不作法に見えるので、小指を先につけて置くとよいと聞きます。要は臨機応変に対処できるよう自分を磨いていくことです。

相手の立場になってできることを

相手の立場に立って
自分のできることを最大限にやる。
これが自分を生かす道である。

お茶といって思い出すのが、豊臣秀吉のエピソードです。

鷹狩りに行った帰りのこと。秀吉は近所の寺に立ち寄り、一人の小姓にお茶を所望します。すると、大きめの茶碗（ちゃわん）にぬるくて薄めのお茶がたっぷりと出てきました。のどを潤した秀吉が一息ついてから、もう一杯を求めると、今度は普通の大きさの茶碗に半分ほど、少し熱めで少し濃いお茶が出てきました。これに感心した秀吉は、さらにもう一杯を要求します。出てきたのは、小さな湯飲みに熱くて濃いお茶でした。

秀吉は、この小姓に自分の家臣になってくれないかと誘います。彼こそがのちの石田三成（みつなり）だったと伝えられています。

お釈迦さまと同時代の勝鬘（しょうまん）夫人にも、三杯のお茶と似たような所作があったと伝えられています。石田三成は、そのことを知っていたのかもしれませんね。たかがお茶出しではなく、「されどお茶出し」なのです。

言われたからやるのではなく、相手の立場に立って自分のできることをやらせていただく。これが結果として自分を生かすことになるのです。

重要なことは直接伝える

重要なことは直接会って自分の言葉で伝える。
これが信頼関係を築く第一歩となる。

組織は、縦割りになりがちです。たとえば、製造部門と営業部門はどうしても仲が悪くなります。製造部門は、「こんなにいい物をつくっているのに売れないのは営業努力が足りないからだ」と文句を言い、営業部門は「一所懸命売っているんだけど、他社と対抗できるだけの物がないからじゃないか」と反論する。売りたい気持ちは一緒のはずなのに、売れないのは自分のせいだとは思いたくない。自己を正当化し、自分の非を認めたくないという気持ちが働くのです。こういう会社は、放っておくと、組織全体が疑心暗鬼に陥って自壊していってしまいます。

私自身もそう感じたことがありました。最初はごく小さな不満や責める心がだんだんと増幅されていって、がんじがらめになってしまいます。そのとき思ったのは、「まず自らを変えなきゃ」ということでした。自分が相手を信頼できなくて相手が自分を信頼してくれるはずがないのです。そのためには、直接会って話すことが大切です。

メールや携帯電話で、気軽にだれとでも連絡を取ることができる時代になりました。しかし面と向かって話さないと、あなたの想いのすべては伝わりません。フェイス・トゥ・フェイスが大切です。

たまには酒を飲んで互いに理解を
深めることは、人間関係を築き、
良い仕事をするうえで大事なことだ。

酒を飲まない人間とは仕事をしない――。

けっこういろんな人から言われます。これは、アルコールを飲むことができない人間とは仕事しない、という意味ではないはず。たまには一緒に酒でも飲んで、ざっくばらんに話をして、お互いに人物を良く知ることによって、より良い人間関係を構築すれば、良い仕事にもつながる、という意味だと、私は解釈しています。

ひと昔前は、仕事が終われば、上司・部下連れだって飲みに行くのが常だったような気がしますが、現在、そういうのは流行らないようです。しかし私は、飲みニュケーションが好きです。一緒に酒も飲みたくない、顔も見たくない、という人と一緒にいて、良い仕事ができるとは思えないからです。仕事は仕事、プライベートはプライベート、と割りきった付き合いもあるでしょうが、相手のこともよく知らずに協力し合っても、最大限の成果を出すことはできないでしょう。そういった意味で、私は、この言葉を肯定的にとらえています。

私自身の成長や人間関係の構築に、お酒はとても多くのものをもたらしてくれました。しかし、酒で失敗する人もいますので、ご注意を！

Ⅲ　自分を磨く

本の力（Ⅰ）

この世には興味の尽きない世界が
広がっている。
歴史や読書はそれを開いてくれる。

以前、書道教室に通っていたころの話です。光明皇后（七〇一～六〇）の「楽毅論」を手本に練習していた時期に、たまたま本屋で目にとまったのが、宮城谷昌光さんの小説『楽毅』でした。楽毅は中国の戦国時代の武将で、稀代の名臣といわれた人物。それを宮城谷さんの想像力でたいへん面白い内容に仕立ててありました。楽毅という人物について分かってくると、書道の練習もかなり力が入ってきました。やはり内容を理解して、物事に取り組むのと、うわべだけ真似事をするのでは、全然違います。

そこから光明皇后にも興味をもちました。この方は、奈良時代の聖武天皇（七〇一～五六）のお后で、仏教の慈悲の教えにもとづいて、貧民や病人、孤児を救済しました。なかでも有名なのが、らい病（ハンセン病）患者の背中の膿を吸ったというお話です。

千人の病人の体を洗ってさしあげようとの悲願を起こし、千人目の重症のらい病患者の背中の膿を吸ったところ、その病人は阿閦如来（善快浄土で今も説法していると伝えられる仏さま）に変わったと言われます。

人の興味とは何がきっかけになるか分からない。この世のなかには興味の尽きない世界が広がっています。それを開いてくれるのが、歴史であり、読書です。

求めていれば、必ず出会える。

私は毎年、元日に寺の役員である檀家さんの自宅に年始のごあいさつに行きます。平成十九年一月一日も、東京都あきる野市の檀家さんの自宅に伺いました。その際、「今、こういう本を読んでいるんですよ」と教えていただいた本がプロローグにも書いた『日暮硯（ひぐらしすずり）』です。そのときの話で何か感じるものがあったので、翌日、本屋に探しに行き、購入しました。この本が私の学校経営にとても大きな影響を与えたことはすでに書きました。この本のなかでいちばん好きなフレーズが、「人というものは、良き人が使えば良くなるものだ」（意訳）という言葉です。私は、つねにこの言葉を実践できているか自問自答しています。容易にできることではありませんが、いつかは恩田杢の境地に到達したいと願っています。

この本との出会いは、偶然だとは思っていません。私が進むべき道を探し求めていたからこそ出会えたのだと確信しています。

「出逢う人には必ず出逢う。それも一瞬早くもなく一瞬遅くもなく」（森信三氏）

これは人だけでなく、本やものごとについても言えることです。その出会いに気づくことができるか、うまく生かせるか、それはわれわれの心がけしだいです。

なかなか変われないのが人間だ。
だけど、必ず変われるのも人間だ。

為せば成る、為さねば成らぬ何事も、成らぬは、人の為さぬなりけり――。

これは貧窮の米沢藩を再興した上杉鷹山の歌とされています。

なかなか成らない難題の一つに「自分の性格を変える」ことがあります。でも、本気で、為せば成るとの信念で時間をかけて努力していくと必ず変わります。本気ということはすべてをそこに集中する心、気力のことです。

私は基本的に内に秘めるタイプです。ものごとを内向きに内向きに考えていくので、当然社交的ではありません。感情を外に出さないから、何を考えているか分からないとも言われます。それは悪く言えば「ネクラ」です。

このネクラの部分を私は変えたいと思い、本気で努力しました。無理して明るく振る舞ったり、ネアカの人間を演じたりもしました。大学のころから徐々に、住職になってからは意識的にやりました。もちろん、長年の生活でつくり上げてきた心の習性があるから、行って戻って、また行っては戻りという感じだけれど、それでも振り返ってみると前進している。高校のころの友だちに今会うと言われるのが、「別人みたいに変わったよね」です。私の場合、もう「ネクラの私」に戻ることはないでしょう。

いいことは宣言せよ

目標をもったら、リアルに描け。
そして内外に宣言してみよう。
言葉の力が実現に導いてくれる。

Ⅰ章で「人生に目的をもて」と言いました。その次は、具体的な目標をもってください。具体的な目標ができると、自分を変えなければ達成できないという局面が必ずやってきます。それが大きいものであればあるほど、強くならなければならないとか、知識を広め、思考を深く鋭敏にしなければならないとか、自分に脱皮を迫らなければ目標の達成はできません。そう、自分を変えるのが第一歩なのです。

このとき、「私はこれを実現する」とか、「こういう人間になる」と、心のなかでより具体的に映像化するのです。さらにそれを書き出し、まわりに宣言する。そのことにより、途中で投げだしてしまいそうな自分を鼓舞することができます。「宣言した以上は、やり遂げなきゃ」と自分を奮い立たせてくれます。また、私が何をしようとしているのか知っているまわりの人たちが、手助けしてくれることも増えるでしょう。

私自身は、もっと成長したいし、しなければならないので、意識的に自己啓発をしています。四十にして惑わずといいますが、実際、迷わなくなりました。五十になろうが、七十になろうが、何歳になってもいい方向で変わり続けたいものです。

カネにならないことに自分の時間と労力を
傾けることのできる人間は、貴重で尊い。

カネにならないことに情熱を燃やせる人はとても魅力的です。趣味であれボランティアであれ、それらは人格を高め、人間の幅を広げることにつながるものです。

私自身は、出身大学の同窓会の役員として、月に一度は母校に通って、在学生の支援をどのようにするかを話し合い、智恵を絞っています。同窓会として企業の説明会や講演会の企画をすることもあります。

これ自体は一銭にもならない仕事ですが、現役の仕事をもって多忙な方々が、情熱をもって活動されている姿を拝見すると、本当に頭が下がります。

また青年僧侶の会に所属していたときは、子どもたちの情操教育のお手伝いをしていました。夏にはキャンプに連れていって、一緒にご飯をつくったり川遊びをしたり、冬には餅(もち)つき大会をしたりするのですが、これもまったくおカネにならない仕事です。

しかし、その仕事は本当に貴重で私に成長する機会を与えてくれました。それまで私は子どもが苦手で、できれば関わりたくなかった。それが今ではとてもかわいいと思えるようになりました。苦手なことをまた一つ克服できたのです。

カネにならないことに情熱を燃やせるか。これは人物をはかるモノサシになります。

頭のいい人、できる人ほど、謙虚であれ。
自分が正しいと勘違いしたら、成長は止まる。

世のなかには頭が良くて、眩(まぶ)しいほど輝く人がいるものです。人の話を瞬時で理解し、反応してくれますし、存在そのものが輝かしくもある。天性のものなのか努力の賜物なのか、凡人には知り難いのですが、それはそれで尊敬にあたいします。

ところが、頭のいい人のなかには言葉に角があったり、協調性の少ない人も多い気がします。これは偏差値至上主義の悪しき風潮によるものでしょうか。頭がいいというだけで自分は偉い者だと勘違いし、自分の考えは正しいと、思いこんでしまう人がいます。

これは、凡夫の自覚とは反対の境地です。謙虚にまわりの声に耳を傾けることも、素直に学ぶ心も乏しくなり、何か問題が発生すると相手やまわりが悪いのだからとなって、反省の心もわいてきません。

そういうわけで、自分は頭がいいと思っている人、優れていると思っている人は、人格を磨く機会に乏しくなるのです。自分こそ頭がいいと思っている人は要注意。そういう人は自分に躓(つまず)きやすい。もしあなたが、自分は頭が良い、優秀だ、という思いをもっているなら、一度、自分を見つめ直してみてください。

ジコチューになりかけたら……

だれも自分のことを分かってくれないと
思い始めたら、要注意。
ジコチューの初期症状だと心得よ。

むかしから「自惚れは人の常」と言いますが、頭のいい人に限らず、ほとんどの人が、客観評価より自己評価のほうがずいぶん高いと言われます。

「上司は私のことを分かっていない」とか「この会社は自分には合わない」などと言って次から次へと職を変えていく人は自己評価がずいぶん高いのでしょう。さて、そういう人の本当の実力はどうなのでしょうか。

人の目は外に向かって付いているから、なかなか自分を客観的にとらえることができないもの。だからこそ、つねに鏡を見て、自分の行動や心の在り方をかえりみる必要があります。「この世での十日間の修行は仏の国での千年分の修行に等しい」（無量寿経）とはよく言ったものですね。それだけ修行しにくい、妨げるものがたくさんあるのがこの世なのかもしれません。

江戸初期の禅僧で「仁王禅」を提唱した鈴木正三（一五七九～一六五五）は、「人間いかに気取ってみても、その中身はしょせん糞袋だ」と言いました。そういって、自己への執着から解き放ったのです。自己中心的な自分になりかけたとき、この言葉を自分に向けて言ってみるのも手ではないでしょうか。

人が嫌がるところにこそチャンスがある。

カー用品の販売会社イエローハットの創業者の鍵山秀三郎さんは、トイレ掃除を心を込めてやることで、会社を繁栄に導き、それをさらに広げて、学校や他の会社をも良くしておられます。そのやり方は、ゴム手袋もせず、素手で、しかも素足でトイレに入って行います。便器にこびりついた汚れをぞうきんでぴかぴかに磨き上げていきます。すると、それだけで商売が繁盛したり、荒れた学校が良くなったりしているそうです。

掃除をすると、その場所がきれいになるだけではなく、その掃除をした人の心まできれいにしてくれるからではないでしょうか？　今まで自分で掃除をしたことがなかった人は、これまで以上に、トイレを使うときに、汚さないように心がけるでしょう。トイレ掃除の陰徳（人知れず行う徳行）を積めば、人々に対する感性や思いやりが俄然（がぜん）高まります。「人が嫌がるところにこそ商機がある」という黄金律を生かして、嫌なことにも積極的にチャレンジできる大人になってもらいたいものです。皆さんも、トイレ掃除、始めてみませんか？

職場を大切に思う心が、仕事の質を上げる。

坊さんの世界では、「一、掃除　二、勤行　三、学問」と言われます。お経を読むより、まず掃除をしなさいというわけです。

お寺の場合、境内や建物を掃除するとなると容易ではありません。夏場はものすごい勢いで雑草が生えてくるし、晩秋にもなると、木々の葉っぱが次から次へと落ちてきて大変です。そんななか、境内や周辺の落ち葉を掃き、建物の床を拭き、トイレをぴかぴかにし、仏具を磨いていきます。私も子どものころからやってきました。

晩秋から冬にかけて大活躍をしてくれるのが竹箒。落葉を掃くときの、サーッ、サーッという音は、風情があっていいものです。風の強い日は難渋しますが、私は、竹箒での掃除が好きです。落ち葉を集めて、きれいになった境内を眺めると、自分の心まで、清められていく感じがします。

会社でも朝一番の掃除を社員総出でやっている中小企業は多いようです。仕事の前に、自分が働く場所をきれいにする。そのことによって職場を大切に思う心が生まれ、仕事に対する情熱が増すのではないでしょうか。

必要なものと不必要なものを分ける。
これができれば、あなたの心は軽くなる。

学校や会社に行くと、「整理整頓（せいとん）」という貼（は）り紙を見かけます。整理と整頓は同じ意味だと思っていたら、違うんですね。

整理は、いるものといらないものを分けて、いらないものを捨てる。整頓はきれいに並べることなのだそうです。私たちが悩むのは整理のほうです。

ちょっと油断をしていると、部屋にいらないものがたまっていき、そのうち足の踏み場がなくなってきて大変です。「いつか必要なときが来るかもしれない」と思い、どこかに積んでおく。ところが、いざ必要となったときに出てこない。一日のうちに何時間も捜し物をしていたりします。だんだん自己嫌悪に陥っていき、片付けさえできない自分はダメなんだ、なんて思ってしまう。

じつはこれ、自分がダメなのではなくて、ただ単にものの量が多いだけ。本当は自分に必要で置いていたはずなのに、いつの間にか不要なものになっていた。

仏教の世界には「喜捨（きしゃ）」という言葉があります。喜んで捨てるという意味です。もち続けたいという執着心から離れるための修行のひとつです。捨てる喜びもあることを知りましょう。

世のなかには楽にいきましょうという
メッセージがはびこっている。
踏ん張るべきときに、それに流されてはならない。

私が最近とても気になるのは、「力を抜いて生きていくと楽ですよ」というメッセージが世のなかにはびこっていることです。哲学者とか識者などという偉い人たちがそんなことを言うから、「ああ、一所懸命にやらなくていいんだ」と思ってしまう。

仏教にもそういうふうに感じられる教えがありますが、それは執着から離れよ、両極端になるなということであって、手を抜いて生きよということではありません。

私自身は今、経営者として一瞬でも手や力を抜いたらおしまいだと思っています。起業家や経営者はみんな今を必死で生きています。そんな人に向かって「もっと楽にやれ」と言おうものなら、「ふざけるな！」と、怒鳴られるでしょう。

頑張りすぎている人が肩の力を抜いてみることは、心身ともに大事です。だけど、まだまだ力があって努力すれば人生の道が開けてくるような若い人たちに「楽にやれ」というのはおかしい。若い人は、「楽にやりなさい」と言われたら、むしろ、「もっと真剣にやれと言われているんだ」くらいのつもりで、自分を励ますべきです。

目標を定めたら必死で努力する。しかし、りきむなということです。りきむと空回(からまわ)りしてしまうからです。そのことを忘れないでほしいのです。

Ⅳ　チャンスを手にする人

孤独は悪いことですか？

孤独は悪いことではない。
自分の人生について深く考える、
またとない機会だ。

最近の若者たちの傾向に、一人でいることを見られるのを極端に嫌うようです。「便所メシ」という言葉を聞いてとても驚いたのですが、一人で食事をしているのを見られるのが恥ずかしくて、トイレでひそかに弁当を食べるのだそうです。

一人でいるとか、孤独でいるというのは、そんなに恥ずかしいことでしょうか。

また、最近は、スマートフォンを手放せず、つねにＳＮＳなどでやりとりをしている人をよく見かけます。聞いてみると、どうでもいいような内容の話をしているとのこと。

たまに思うことがあります。思いきって、スマートフォンもパソコンもないところに行ったら、どれだけ楽だろうか、と。われわれは、つねにだれかとつながっていないと安心できない体になってしまったのかもしれません。本来、スマートフォンもパソコンも道具にすぎません。しかしその道具に、心まで支配されている気がします。

孤独は、悪いことではありません。本当の自分を見つめる良い機会です。人と一緒にいたらできません。たまには、スマートフォン、パソコンから離れて、孤独になり自分自身の人生を思惟（しゆい）してみてください。

孤独は、人のありがたみ、
ぬくもりに心底気づかせてくれる。

人生でいちばんつらいことは、孤独ではないかと思うことがあります。特に、まわりにまったく人がいないという孤独よりも、大勢のなかにいるんだけど、ひとりぼっちであると感じる孤独のほうがつらい気がします。

経営者というのは基本的に孤独なものです。最終的な決断は一人でしなければならないし、すべての責任を背負わなければなりません。私も、理事長になる前の六カ月間、そして理事長になりたてのころは、深い孤独を感じていました。夢のなかで仕事の続きをしていて失敗し、ハッと目が覚める。そして、「ああ、夢でよかった」ということがよくありました。そんな夢も最近まったく見なくなりました。少しは経営者らしくなってきたということでしょうか。いや、きっと私の考えを理解し、支えてくれる仲間が増えてきたからでしょう。

孤独を感じたことのある人は、人とのつながりのありがたみを感じることができるはずです。孤独をおそれることなく、孤独を楽しめるようになれば、その分、人のありがたみ、ぬくもりに気づくことができるでしょう。

◆ 美徳は時に悪徳になる ◆

名作『次郎物語』の著者として知られる下村湖人（こじん）（一八八四～一九五五）の晩年の作品に『青年の思索のために』があります。長らく絶版になっていたのを出版社に働きかけ、復活させたのが前にも紹介した鍵山秀三郎さんです。以前お会いした際に、鍵山さんから「僕の人生を変えた本がこれです」といって紹介いただいた本です。

鍵山さんは昔から掃除熱心で、二十代のころ、会社の外を掃除していると、「なんだ、この偽善者！」と、ののしられることがあったそうです。自分は良いことをしているのになぜ批判されなければならないのかと悩んだ。さらに、事業がうまくいかなくなって、苦しんでいたとき、本屋でたまたまこの本を見つけ、苦しみを乗り越えることができたそうです。この本のなかの一節に、

「忍耐、謙譲、調和、勇気というような美徳も、それが美徳であるのは、その根底に愛の心が流れているからでありまして、もしそうでなければ、忍耐は怨恨（えんこん）の源になり、謙譲や調和は卑屈や妥協の別名にすぎず、勇気は粗暴とえらぶところのない悪徳であ

るかもしれないのであります」

とあります。

忍耐は美徳だけど、恨みに変わってしまう危険がある。謙譲は時として卑屈に変わる。まわりのみんなと調和することも大切だけれども、時としてそれは妥協に変わる。勇気は粗暴に変わる危険性もあるから、気をつけなさい、というのです。

私は、この言葉を鍵山さんから聞いたときに、ショックを受けました。それまで自分は、忍耐力はだれにも負けない自信がある、と自負していたのですが、それは忍耐ではなく、恨みだったのだということを気づかされました。それからは、二度と忍耐に自信があると言わないようにしています。

下村湖人は、美徳を悪徳に変えないためには、根底に愛がなければならないと主張します。鍵山さんに言わせると「思いやりの心」。ことあるごとに自分は大丈夫か、振り返っています。

ある日突然、分かるときがくる。
一見関係のない事がらが、
解決のヒントを与えてくれる。

ある経営者が、「考えたんですけど、できませんでしたと、悪気もなく言ってくる社員が多い」と言って嘆いていました。仕事には課題がつきものです。社会人になると、その課題をどう考え、乗り越えていくかを問われる日が必ずやって来ます。課題が次から次へとやって来て、もう行き詰まりだと思えるときにこそ、最もいい解決策が見えてくるものです。だから、そこから逃げてはなりません。

われわれは本当に大切なことは四六時中考えているものです。だからこそ、フッとひらめく。つねに多くの課題を抱えている経営者は、休日に体を休めることがあっても、頭を休めることはありません。若い皆さんも、つねに頭の片隅に仕事の課題があるぐらい仕事に情熱を燃やしてほしいものです。

いいアイデアは、そうそう出てくるものではありません。そのためには、思い続け、心から離さないことです。すると、気分転換しているときや、まったく違うことをやったり、違うところに目を向けていたときに、フッと、これだというアイデアや解決策が浮かんだりします。また時には、本のなか、先人の知恵にヒントを見つけることもあります。思い続けることを忘れないでください。

チャンスは準備された心に降り立つ

「風はマストに帆が張られている船にのみ訪れる」という言葉を聞いたことがあります。チャンスを手にする人は常日ごろから万全の準備をして、つねに風（チャンス）が来ることに備えているというのです。

道を歩いていてたまたまおカネが落ちていたというのは単なる偶然ですが、仕事のうえでチャンスが訪れるというのは、普段から努力し求めているからこそ。「チャンスの女神には後ろ髪がない」とよく言われますが、求めていない人はチャンスがやって来ても、それに気づかないし、万一気づいたとしてもつかむことができません。

世のなかで、成功者と言われる人たちは運もいいけれど、それ以上に努力もしているものです。運が悪いと嘆いている人の元に、運はめぐってきません。運は自ら、たぐり寄せるものです。

いまつらいといって目を閉じていると、チャンスがやってきても見えません。つらいながらも、状況をちゃんと見ておく目は必要です。いや、つらいと思うときこそ、目を見据えて状況をとらえておかねばならない。目をそらしたくなったら、歯をくいしばって、チャンスの女神の到来を、万全な準備をして待つのです。

◆試練をチャンスにした若者の話◆

いいことと悪いことは入れ替わりでやってくると言われます。しかし、つらい時期をダラダラと過ごしていたのでは、いつまでたってもいいことはやって来ないでしょう。

苦しいときに腐ってしまうのではなく、苦しいときこそ、地ならしの時期だと思って頑張れるかどうか。でも、大抵の人は苦しい原因を他人のせいにしたり、「なんで私だけが」と天を恨んだりして、腐ってしまいます。そういう人にはチャンスはなかなか訪れません。

先に紹介した『青年の思索のために』のなかに、リンゴ農家を営む若者の話が紹介されています。

若いながらリンゴ農家として成功をおさめた若者に下村湖人が「林檎（りんご）園の経営をはじめてから、一番つらいと思ったことは、何でしたか」と聞くと、こう答えます。

「労働をつらいなんて思ったら、まるで問題になりませんし……。あ、そうそう、一

度だけしみじみつらいと思ったことがありましたよ。それはこの仕事をはじめた最初の年、台風におそわれたことです。私が二十三の時でした」

被害は台風のたびにあるけれど、二回目からは、ちっともつらいとは思わなくなったというのです。なぜそうなったかというと、考え方を変えたからだと若者は答えます。風に落とされたリンゴを天の特別の賜物だととらえたのです。

愛情をもって育てたリンゴが無惨にも風に吹き飛ばされるのを見ていて、この若者は「今にも気が狂いそうでした」と語っています。それでも彼は番小屋からリンゴを見ていた。すると、だんだんと同じ木のリンゴでも、すぐに落ちてしまうリンゴと、なかなか落ちないリンゴがあることに気がついたのです。若者はこう言います。

「私ははっとしました。そしてこう思ったんです。——台風は毎年吹く。吹くものと覚悟しなければならない。それは天の運行だからだ。この天の運行を予定しないで林檎園を経営するのは、人間が勝手に天に甘えるというものだ。では、天に甘えないようにするにはどうしたらいいのか。それは、林檎園を完全に台風から保護するか、さもなければ、台風に襲われても吹きおとされないような丈夫な林檎を育てるほかはない。そのいずれもができないとすれば、林檎が吹きおとされるのが当然で、その林檎

が、まだ十分には天意にかなっていないからだ。天意にかなった林檎なら、かならず梢にのこる。現にどんなにひどい台風にも吹きおとされない林檎がかならずいくつかはあるではないか――」

彼は、天を恨むどころか、天に感謝しないではいられなくなったといいます。そして、吹き落とされたリンゴはジャム工場に売り、そのお金を特別預金として貯め、将来的には「青年の家」を建てて、人生や農業に役に立つ良い本をそろえて、生きる道を真剣に語り合える場をつくりたいと、夢を語っています。

下村湖人はこの若者の、台風の際に吹き落とされるリンゴを「じっと見ていた」そのことに注目し、次のように言っています。

「たいていの人は、そんな場合になると、心も態度もみだれがちになり、むだだとわかりきっているのに、そこいらをかけずりまわったり、泣いたり、ののしったり、ため息をついたり、いろいろと狂気じみたことをするものであります。……自分ではどうにもならないとわかり切っている災害に対して、いたずらにさわいでみたところで仕方がありません。そうした場合大事なのは忍従であります。忍従は屈服とはちがいます。さけがたいものをさけがたいものとしてそのままに受けとり、そのさけがたい

ものの中にあって魂の自由を確保し、新しい出路を発見し創造せんとする心の態度、それが忍従であります」

人生には試練はつきものです。なかには、これでもか、これでもかというくらい試練に見舞われる人もいます。そんなとき私は、

「試練は耐えられない人のところにはやってこない」

という言葉を思い出します。きっと耐えられるから試練はやって来るのです。

リンゴ農家の若者が無惨にも台風がリンゴを吹き落としていく様を見て、それを自分に天が与えた恵みだと感謝の心で受けとめました。感謝することで救われたのです。

その天恵の試練に感謝し、素直な心で学んでいく。それが、しなやかに生かされ生きる基本なのではないでしょうか。

失敗したときの態度

失敗したら、ごまかすのではなく、
全力でフォローしろ。

あるとき、自宅から少し離れたところで自転車に乗っていたら、横から自転車が突然出てきて、衝突してしまいました。自転車に乗っていたのは中年の女性で、転びはしなかったけれども、女性の自転車の前輪の泥よけがグニャッと曲がって、うまくタイヤが動かなくなってしまいました。そのまま走り去るわけにもいかず、女性の自転車を私が引っ張り、近所の自転車屋へ行き、修理してもらいました。あとで何か不都合が生じたら申し訳ないので、別れ際に、「何かあったらここへ連絡ください」と言って、名刺を渡しました。

数日後、近所の八百屋さんから、「住職さん、いいことをしましたね」と声をかけられました。自転車の女性は八百屋の常連さんだったらしく、「あそこの住職はぶっかってお互いさまなのにこんなに丁寧に対応してくれた。若いのに素晴らしいのね」と、事細かに話していったそうなのです。

失敗したときにどう向き合うかによってその先の状況はまったく違ってきます。もし、その場からとっさに逃げてしまっていたら、逃げたという事実を自分のなかでひきずっていたに違いありません。失敗したら、全力でフォローしろ。私の経験則です。

若いときの時間は貴重だ。
先人の成功や失敗に学ぶことは、
時間を生かす最良の方法でもある。

人生で何がいちばん貴重かと問われたら、私は「時間」と答えます。健康や人とのつながりももちろん大事なものですが、この世に生まれ、自分のために許された、限りある時間を使ってどのように成長していくかが最も大事だと思うからです。

おカネがなくなることに敏感な人は多いけれど、時間を無駄に使っても平気な人は案外多いものです。かつての私がそうであったように。過ぎ去った時間は絶対に取り戻せません。だから、若い人には特に強調しておきたいのです。

時間を有効に使う方法の一つに、先人の智慧（ちえ）に学ぶことがあります。具体的には、本を読み、人に会うことです。われわれが、今のような便利な生活を享受できるのは、先人たちの積み重ねたものがあるからです。そして、われわれは、次の世代に、よりよいものをつないでいく使命があります。先人の成功・失敗を学ぶことにより、同じ失敗をすることは減り、はやく次のステップへ進むことができます。

日本をはじめ世界には素晴らしい先人が無数にいます。人生をかけて心を鍛えぬいた先輩が非常に多いのです。できれば、先人を乗り越えたい。そうしてはじめて自分も進歩し、社会も進歩していくからです。そのために、時間は重要です。

成功と失敗の関係

成功の反対は、失敗ではない。
何もしないことだ。

「コンビニがあれば、便利なのに」。だれもが思っていながら、三十年間実現せず。過去に誘致しようと試したけれど、うまくいかなかったようです。「過去はダメだったけど、今ならうまくいく可能性もある」と思いたち、取引先の銀行へ飛び込み、「コンビニエンス・ストアを誘致したいんだけど、何か手はないか」と支店長に直談判。ちょうど大手のコンビニ・チェーンがサテライト店（オーナーさんが支店を出すシステム）設置を進めているとのことで、話がとんとん拍子で進み、平成二十年、埼玉工業大学に待望のコンビニが誕生。毎日、大勢の学生さんに利用いただいています。

過去に挑戦してダメだったことも、時間がたって条件が変わることもあるのです。

以前、ミャンマーで医療活動を行っている小児科医、吉岡秀人さんの講演を聴きました。設備の整っていないなかで、できるかぎりの医療活動を行っています。彼は、つねにもてる力の百パーセントを出し切ります。目の前の患者さんを何とかしてあげたい、という願いがあるからでしょう。講演のなかで印象に残ったのは、「成功の反対は失敗ではない。成功の反対は、何もしないことだ」という言葉。失敗をおそれずに、つねにチャレンジできる人間になりたいものです。

◆ 飛ばないカモメたち ◆

過去に出会った本に、『希望をはこぶ人』（アンディ・アンドルーズ著、弓場隆訳、ダイヤモンド社）があります。両親を病気と事故で亡くして希望を失い、ホームレス生活を送っていた若者が、一人の老人と出会い、人生を前向きに切り開いた体験をつづったノンフィクションです。

やがてコメディアンとなって人気が出たあと、作家になった彼は、「ニューヨークタイムズ」紙で、アメリカで最も影響力のある人物の一人と賞賛されています。この本の中に、次の一節があります。

五羽のカモメが防波堤にとまっている。
そのうちの一羽が飛び立つことを決意した。
残っているのは何羽だい？
……四羽です。

そうじゃない、五羽だよ。

いいかい？　誤解されがちだが、決意そのものには何の力もないんだ。

そして、決意しても、実際に翼を広げて空に舞うまでは残りのカモメとどこも違わない。人間も同じだと言うのです。

さらに、「人は、他人のことは行動で判断するのに、自分のことは決意で判断することがよくある」と続きます。鋭い指摘です。

私はラジオでこの詩を聴き、夜の十時に書店に駆けこんで買い求めました。

行動が伴わないものはどんなに素晴らしい考えでも意味がない……。本当にそうです。

世のなかには自己を奮い立たせるような素晴らしい言葉が溢(あふ)れています。「じゃあ、それを実践しているの？」と問われると、どうなのでしょうか。

まずは小さな一歩を踏みだすことが大事なのです。

また、世のなかには人生訓のような本もたくさんあります。しかし、どれも基本的に当たり前のことを言っていて、意外に新しいことはないものです。その当たり前の

ことを実践できるのかというと、それがなかなか難しい。本当に実践した人は成功しているのかもしれません。ほとんどの人が実践しないか、したとしても継続できずに途中であきらめたのではないでしょうか。読んで、なんとなく成功した気になって実践しない人のなんと多いことでしょうか。やるのは本の力ではなく、本人です。だから、必ず実践できる方法を発明したのなら、それこそミリオンセラーになるのかもしれません。

できる人というのは、素直にやる人です。こういう人は、なぜこれを指示されたのか、瞬時に理解できるようです。

なかには、理解してからでないと動けないという人がいます。それをして何になるの？　と思ってしまうのです。最近は、「それをやってどんな得になるの？」と、損得ではかる人もいます。でも、やってみると、やって良かったとなることが多い。こういう人は、会津の藩校・日新館の教え「ならぬものは、ならぬ」の逆バージョンで、「良いものは良い、だからまずやってみろ」ぐらいで腹をくくってみることです。

V　深く生きる

――仏教の智慧に学ぶ

苦しみの原因

人生に苦しみがつきまとうのはなぜか。
お釈迦さまは、この問いに命がけで臨んだ。

お釈迦さまが開いた仏教は、「人生は苦しみである」という、かなりシリアスな前提で出発します。四苦八苦という言葉を聞いたことがありますか？

四苦とは生・老・病・死のことで、生まれることも苦の始まりという意味で、苦の一つに入っています。これに、次の四つを合わせて、「四苦八苦」です。

愛別離苦（愛する人といつかは別れなければならない苦しみ）
怨憎会苦（嫌いな人と会わなければならない苦しみ）
求不得苦（求めるものが手に入らない苦しみ）
五蘊盛苦（成長するにつれて表れてくる苦しみ＝出世欲、名誉欲など）

これらを一度も経験したことがないという人はまずいないでしょう。この瞬間苦しくなくても、人生にはその時々にいろいろな苦しみや悲しみがつきまといます。

お釈迦さまは人間の「苦」に真正面から向き合い、それを乗り越えるために命がけでチャレンジしました。そして苦しみの原因を私たちの心に生まれ続ける「執着」や「煩悩」の中に見いだしたのです。仏教は亡くなった人のためにあるのではありません。まさに、今ここで生きている人のためにあるのです。

人間であるがゆえに……

カッとなって人を責めたり、
不機嫌になったり、恨んだり……。
すべて人間であるがゆえの苦しみである。

人はついカッとなって人を責めてみたり、あれが欲しい、これも手に入れたいと不足の心でいっぱいになったり、些細なことで不機嫌になり、後で落ちこんだりします。

また、傍目から見てそれなりに成功している人でも、出世欲、財産欲、名誉欲、愛欲、嫉妬……と止まるところを知らない欲望や感情の渦に翻弄されているものです。

なぜそうなるのか、よくよく見てみると、自分の心が人に過剰に期待したり、人と比べて、自分を苦しめ、不自由にしていることが分かります。動物だったら、そんなことでいちいち悩まないでしょう。つまり人間であるがゆえの苦しみなのです。

冷静に振り返ってみて、「あのとき、なぜあんな些細なことにこだわって眠れないほど苦しんだのか」と思ったり、「めちゃくちゃ傷つき落ちこんだけれど、よくよく考えてみると、素直に反省すべきことだったのだ」ということが往々にしてあります。苦しみの原因がどこから来るかというと、人間の心にこびりついた「所有」や「支配」の欲望なのです。そういう自分から逃れる道は、まずは自分の心の動きを冷静にとらえて、「今、私は〇〇に囚われているんだな」と受けとめ、その心を時の流れにさっと流してみる。それが苦しみから自由になる第一歩です。

恨みは生きる原動力にもなる

恨みも憎しみも、プラスの力に
変えることができるなら、意味がある。

人を恨んではいけないと意識しても、なかなかできないものです。世のなかには理不尽なことが多いし、いい人ばかりとは限らない。ついついもってしまうのが恨みの心というものです。

しかし、恨みも、恨みを晴らすといった悪い方向に働かさなければ、生きていくうえで大きな原動力になります。冷静に客観的に相手をとらえ直して、自分より優れたところがあると認めたら、どうやったらあいつに負けないような自分になれるのかという方向に気持ちを切り替えるのです。

ハンムラビ法典の「目には目を、歯には歯を」というくだりは有名ですが、これは「受けた苦痛以上のものを相手に返してはいけない」ということを説いています。われわれは、他者から何か苦痛を受けると、「十倍にして返してやる」なんて意気込みますが、間違いなんですよね。人間は、今も昔もあまり進歩していないのかもしれません。

そんな恨みは、ぜひ、プラスの力に切り替えて、良い人生を送りたいものです。

◆ 法然上人の発心（ほっしん） ◆

浄土宗の開祖、法然上人（幼名＝勢至丸（せいしまる））が九歳のときに見舞われた過酷な試練。平安末期の一一四一年、美作（みまさか）の国（いまの岡山県）で押領使（おうりょうし）（警察官のような仕事）をしていた父親が、土地の争いをめぐって夜討ちに遭（あ）い、瀕死（ひんし）の状態に陥ります。

武士の子は仇討ちするのが当然とされた時代。しかし父は、幼い勢至丸を枕元に呼び寄せて、こう言います。

「敵を恨んではいけない。もしおまえが敵を恨み、私の仇を討てば、今度は敵の子どもが、おまえを仇と恨み、おまえに襲いかかるだろう。そんなことより早く出家して、私の菩提（ぼだい）を弔（とむら）ってくれ。そして、すべての人が救われる道を見つけてくれ」

そうして父は息を引き取りました。その遺言どおり、幼い勢至丸は仏道へと入っていくのです。

法然上人は晩年に、「父の遺言忘れがたく」と述懐しています。幼い心に恨みの念が起きなかったはずはありません。仇を討つな、と言われて、「はい、そうします」

とはいかなかったはずです。「なんで父のいのちを奪ったのか、私から父を取り上げたのか……」。別離の悲しみ、恨みから生じる、こうした身もだえするほどの苦しみや葛藤を法然上人は学問への情熱に変え、求道の原動力としたのではないでしょうか。いや、そうするしかなかったのかもしれません。

九歳で出家した勢至丸は、その学識を高く認められ、十三歳にして当時の最高学府ともいうべき比叡山に登り、さらに研鑽を重ねます。しかし本来の仏教から離れ、名利栄達を求める風潮を嫌った法然上人は、十八歳のとき、遁世の志を立て、比叡山の黒谷に移り、四十三歳で山を下りるまで、世俗を離れ、修行と学問に勤しみます。そして、ただ南無阿弥陀仏と唱えるだけですべての人は救われる、という教えに到達しました。

称名念仏によってすべての人々を救済しようとした法然上人の深い願いは、どうしようもない悲しみ、恨みが出発となったからこそと言えるのではないでしょうか。

ものごとをありのままに見ることは難しい。

この世は苦しみである、と看破したお釈迦さまは、その苦しみから逃れる方法を示しています。その一つが「正見（しょうけん）」です。これは、ものごとをありのままに正しく見る、正しく受け入れるということです。なんだ、そんなの当然でしょ、と思う人がいるかもしれません。しかしこれが、なかなか難しいのです。

同じことを注意されたとしても、Aさんに注意されたときと、Bさんに注意されたときで感じ方が違うことはありませんか？　Aさんに言われるなら納得がいくけど、Bさんに言われる筋合いはない、と思ったことはありませんか？　注意された内容がもし本当に直すべきことなら、だれに言われようが、きちんと受けとめなければいけないはず。しかし、われわれは、何を言われたかより、だれに言われたかを重視する傾向があります。

嫌いな人が失敗したら、ここぞとばかりに責める人がいます。しかしその一方で、仲の良い人が失敗した場合には、見逃したり、見て見ぬふりをしたりする人がいます。これも正しいものの見方ではありません。

ものごとをありのままに正しく見る。これ、本当に難しいのです。

三輪清浄（さんりんしょうじょう）

だれかのために何かをするとき、
そこに見返りを求めてはならない。

大乗仏教の修行の一つに「布施（ふせ）」があります。布施とは与えること。喜捨（きしゃ）とも言います。いちばん分かりやすいのは、衣食など物を与える布施です。この布施を行うときに気をつけるべきことがあります。それは、見返りを求めないこと。ギブ・アンド・テイクではありません。そして、施しを与える人、施しを受ける人、施される物、その三つすべてが清らかでなければ、本当の布施にはなりません。

①慈善団体に多額の寄付をしました。そのことをマスコミに大々的に宣伝して、私を有名にしてください、というのでは、施しを与える人が清らかではありません。

②こいつには今までさんざん迷惑をかけられた。だからこいつがおれに贈り物をするのは当然だ、というのでは、施しを受ける人が清らかでありません。

③脱税してがっぽり稼いだおカネです。これをボランティア団体に寄付します。有効に使ってください、というのも、施されるものが清らかでありません。

すべてが清らかであるか、調べるのは容易ではありませんが、あなたが、だれかのために何かをするときには、あなたの心のなかをもう一度確認してみてください。

そこに私心はありませんか？

人は一人で生きられない。
多くの人に、ものに、生かされ、支えられながら、
ここにある。

仏教の根本思想に「縁起（えんぎ）」という考え方があります。

この「縁起」、正確には「因縁生起（いんねんしょうき）」です。すべてのものごとは「因」と「縁」とで成り立っているということです。

ものごとが生起するには因＝直接原因（種）と、縁＝間接原因（条件）が必要です。植物が発芽するには、まずは種が必要です。しかし、種だけで植物が発芽するかというと、そうではなく、水がなければならないし、太陽の光や養分を含んだ土、そして空気も必要です。このようにいのちが発露するには種（因）のまわりにあるさまざまな縁（条件）が不可欠なのです。

つまり、この世のいのちあるものはそれ単体で存在するのではなくて、まわりのものと関わり合いをもつことによってはじめて存在するわけで、私という存在も、父母やご先祖のいのちのつながりはもちろんのこと、あらゆる人やものや事柄とのつながりのおかげのなかで生かされています。

この当たり前のことに気づき、感謝の気持ちをもって日々暮らすならば、私たちの生活はもっと豊かになるはずです。

気の遠くなる確率でこの世に誕生したのが
私たちだ。人生を意味あるものにしなければ、
私のいのちに申しわけない。

仏教には、人間として生まれてくることがどれほど稀なのかを示す寓話があります。「盲亀浮木のたとえ」です。

目の見えない亀が深い海の底にいます。海面には一枚の板が浮かんでいて、板には小さな穴が開いています。板は、風に揺られ波に揺られて西に行ったり、東に吹かれたりして漂流しています。亀は百年に一度だけしか水面に頭を上げません。たまたまその亀が海面に頭を出したら、板の穴の中だった――。ほとんどあり得ない話ですね。

この寓話を信じるかどうかは別として、私たちが非常に稀な確率でこの世に生まれてきたということは、精子と卵子が結合して一つの生命体が出来上がるその過程ひとつとっても明らかです。

一回の射精に含まれる精子の数は一億〜三億といわれます。それらが卵子に向かって一斉に泳ぎだすわけですが、五、六十ミクロンという小さな体からすれば子宮までの道のりは遠く、多くの試練が待っています。トップでゴールできなければ卵子と結びつくことはないし、排卵の時期でなかったらトップになっても死が待つだけ。こういう過酷な競争に勝ち抜いて生まれた奇跡のような存在、それが私たちなのです。

無数の先祖のいのちが今ここに

私たちは壮大ないのちのつながりから
生みだされた尊い存在だ。

私たちが今、こうしてあるのは、精子と卵子の奇跡のような結合の結果だということをお話ししました。もうひとつ、自分の存在を考えるうえで、じつに不思議で、驚くべき事実があります。

私たち人間は一人の例外もなく、父と母に生を享けました。もし今は母子家庭であったり父子家庭であったとしても、間違いなくあなたにはご両親がいた。さらにご両親にはそれぞれに父と母が確実にいます。そうして五代までさかのぼると三十二人の父母がいることになり、十代さかのぼると千二十四人、三十代ではなんと一億六百九十五万人にものぼります。

自分一人で生きてきたように感じていたこの身にはものすごい数のご先祖の血やＤＮＡが受け継がれているわけです。あなたを中心に考えれば、無数の先祖たちがただの一度の間違いもなく正確にバトンタッチしてくれなければ、あなたはここに存在していないのです。

私たち一人ひとりは、言ってみれば、壮大な連鎖のなかから生み出されたじつに尊い存在なのです。

◆ 法然上人の偉大なる発見 ◆

仏教の経典類は五千巻にものぼるといわれます。キリスト教の新約聖書が二十七の書からなっていることを考えれば、その数のすさまじさが分かります。

この、五千巻もの仏教経典類は「一切経」と呼ばれ、経、律、論からなり、三蔵とも呼ばれています。「経」はお釈迦さまが説いた言葉で、「律」は仏教徒が守るべき規範、「論」はお経の解釈です。ちなみに「一切経」をすべてマスターした人を三蔵法師といいます。『西遊記』で有名な唐の時代の玄奘三蔵のほかにも三蔵法師はいるんですね。

法然上人は「一切経」を五回読んだといわれます。そして、すべての人々が救われる道をそのなかに発見します。「南無阿弥陀仏」をひたすら称えれば、みな極楽浄土に生まれることができるということが書かれてあったのです。

それまでの仏教では、悟りに至って救われるには、戒律の厳守はもちろんのこと、難しい学問を修め、厳しい修行をしなければならず、さらには、たくさんの寄進をし

て寺をつくるなどしなければなりませんでした。しかしそれができるのは、ほんの一握りの人です。すべての人々を救う道が必ずあると信じた法然上人は十八歳のときに、比叡山の黒谷別所に移り、世間からも比叡山内部の社会からのつながりも絶って、「一切経」を読む日々に明け暮れ、ついに、念仏を唱えれば救われるという教えに到達します。その後、比叡山から下りて、念仏だけを唱えればいいと説いてまわり、爆発的に大衆に広がっていくのです。

法然上人は、それまでの、あれもこれもやらなければならない仏教の教えから、あれかこれか、一つだけ一所懸命やればいいという仏教に切り替えた最初の人です。それ以降に登場した鎌倉仏教は、だいたい同様の流れをとっています。まさに法然上人が出てきて、衆生が救われる道が急激に広まったわけです。

さて、念仏のことがどこに書かれてあったかというと、『観経疏』（観無量寿経を唐代の僧・善導大師が独自に解釈した本）のなかです。

一心に専ら弥陀の名号を念じ、行住坐臥に時節の久近を問わず、念念に捨てざる者、これを正定の業と名づく、かの仏の願に順ずるが故に

これは、「一心にひたすら弥陀の名号を唱えて、動いているときも止まっているときも座っているときも寝ているときも、時間の長短に関係なくつねに念じていれば必ず救ってくれる。それが仏さまの願いであるからですよ」と書いてあるのです。

「南無阿弥陀仏」とはどういう意味か。南無とは「帰依する」ということで、「阿弥陀仏に帰依します（すべてお任せします）」というのが南無阿弥陀仏の意味です。

なぜ念仏が必要なのかと疑問をもつ前に、とにかく一度やってみることです。埼玉工業大学では夏休みに長野にある智香寺念佛道場で、学生、保護者、教職員とともに「宗教研修」を行い、お念仏を、木魚を叩きながら、あるいは五体投地（額、両肘、両膝の五点を地に付けて行う礼拝）をしながら何十回、何百回と唱えるうちに、「あれこれ要らぬことを考えていた頭がすっきりしてきた」とか、「心が楽になった」という感想をもらします。ほとんどが初めて念仏を唱えたという人々です。

ここで必要なのは「凡夫の自覚」です。この世の悩みや苦しみ、そして生き死にの問題は自分の力でなんとかなるものではありません。自分の力では無理だということを認識したうえで、阿弥陀仏に救ってもらうのです。どんなに言葉を尽くしても信じる気持ちがなければ救われない。ここはとても難しいところです。

法然上人は晩年に四国に流罪（るざい）になりますが、四国に向かう途中のこと、遊女（ゆうじょ）が寄ってきて、「こんな仕事をしている私でも救われますか？」と尋ねます。

そこで上人はこう答えます。

「今すぐ救われたいのであれば、その身そのまま念仏を唱えながら命を捨てる覚悟で遊女をやめなさい。それができなければ、今の生活をしながら念仏しなさい」と。

命を捨てる覚悟なんて、そう簡単にもてるものではありません。しかし、そういう弱い人でも救ってくださるのが、阿弥陀仏という仏さまなのです。『観経疏』のなかの「念念に捨てざる者」とは、ずっと思い続けて忘れないということです。

現代では困ったときだけ神仏に向かって「助けてください」とお願いする人が多いようですが、法然上人は常日ごろからの真剣な姿勢を求めたのです。

人は罪を犯さなければ生きていけない。
法然上人は、後世に安心を与え、
今を生きる道を開いた。

仏教の戒律に、「殺さない、盗まない、嘘をつかない、不倫をしない、酒を飲まない（五戒）」があります。しかし、これらのすべてを守って日常生活を送るのは不可能でしょう。おそらくこれらの戒律を一度も破ったことがない、という人はいないでしょう。戒律を犯さずにはいられないのが人間です。そういう人間に対して法然上人は称名念仏という、来世で必ず救われる方法を説きました。後生を安心することによって今を生きられる道を開いたのです。

守れない戒律をもつことに意味があるのか、と思う人もいるかもしれませんね。私自身も僧侶としての戒律を受けています。しかし戒律を破らなければ生きていけない、という思いが、本当の「凡夫の自覚」につながるのだと思うのです。

法然上人は人間の業（ごう）をとことん知り尽くした人間ではなかったかと思います。私はそこにとても惹（ひ）かれます。やっぱりこの世は人間の業の固まりです。私もイヤというほどそれを見てきたし、自分のなかにも見てきました。だからこそ、人間は泥沼に咲く蓮華（れんげ）の花のような生き方をしてみたいと思うのではないでしょうか。

無財の七施

カネやものがなくても、
あなたはまわりの人を幸せにできる。

布施という修行のなかにおカネやものがなくてもできる実践行があります。「無財の七施」です。

・眼施（げんせ）――やさしい眼差（まなざ）しで人に接する
・和顔悦色施（わげんえつしきせ）――にこやかな顔で接する
・言辞施（ごんじせ）――やさしい言葉で接する
・身施（しんせ）――重い荷物を持ってあげるなど、体でできることを奉仕する
・心施（しんせ）――他のために心をくばる
・床座施（しょうざせ）――席を譲る
・房舎施（ぼうしゃせ）――泊まる家を提供する

房舎施は難しいとしても、他の六つは、誰にでもできることです。喜んでいる人がいたら一緒に喜んであげる。悲しんでいる人がいたら一緒に悲しんであげる。いつも笑顔でいる。分かりやすい言葉で、相手に話しかける。これらはすべて立派な修行です。あなたにもきっとできるはず。ぜひ今日から実践してください。少しずつですが、きっとまわりの人を幸せにできるはずです。

◆ミャンマー修行記◆

平成二十三年（二〇一一）の六月、私はミャンマーで五日間の修行をしてきました。日本の大学で勉強し、日本に帰化したセインさんという同年代の男性との出会いがきっかけでした。ミャンマーの男性は人生で必ず一回は出家するという習慣があり、親孝行のためにも近いうちに修行をしたいというセインさんの話を聞いて、「そのときが来たら私も誘ってください」と言っていたのです。

ミャンマーといえば、上座部（じょうざぶ）仏教の国です。お釈迦さまが説いた仏教はインドで発祥し、アジアの国々に伝わっていきますが、中国、朝鮮、日本に伝わったのが大乗仏教、そしてタイ、ミャンマー、カンボジア、スリランカの国々に広がっていったのが上座部仏教です。

大乗仏教で生きてきた私にとって上座部仏教の寺での修行は、同じお釈迦さまの教えでもこんなに違うものなのか、と大いに実感した旅でもありました。

身につけるのはオレンジ色の布二枚のみで、一枚は腰に巻き、もう一枚は肩からタ

スキ状に掛けます。下着は一切着けてはなりません。普段使っているものは一切使えず、すべて新しいものにしなければなりません。しかも自分で用意することは許されません。用意するのはスポンサーで、これが修行僧に対する「供養」で、寄付をした皆さんの功徳になるとのこと。日本からやって来た私にもスポンサーが付いてくれました。

そこはヤンゴン市内にある有名な禅寺で、週末は一日に七回、平日は六回の坐禅を行うのですが、朝と夕方の時間帯は、一般の方々が大勢やって来て、お坊さんと一緒に坐るという珍しいやり方をしていました。

私の寺は浄土宗で、修行というと「南無阿弥陀仏」を何百、何千とお唱えする称名念仏です。普段、坐禅などやったことのない私が呼吸で心を調えるというのはなかなか難しいものがありました。

朝のお務めを終えると、鉢を受け取り、裸足で托鉢に行きます。信者さんの家を訪ね、炊いた米を少しずついただいてまわるのですが、だいたいご飯を入れてくれる家は決まっているようでした。三十軒ぐらいまわって気づいたのは、立派な家に住んでいる人よりも貧しそうな家に住んでいる人のほうがご飯をくださるのです。そのうち

鉢のなかのご飯が増えて重くなってくる。こうして托鉢でいただいたものだけがお坊さんの食事となります。

お坊さんの食事は朝と昼の二食のみで、あとは翌朝まで水分以外は口にしません。それは難行だと思うでしょうが、そんなことはありませんでした。

修行中の食事というと、精進料理を思い浮かべる人が多いでしょうが、向こうでは魚も肉も食べます。それは殺生になるんじゃないかと思われるかもしれませんが、自分で殺さなければいいと考えるのです。他の人が殺して食べ物として出されたものは、むしろありがたくいただかなければならないのだそうです。ほとんどがカレーでしたが、じつにいろんな種類があって、またとてもおいしくいただけました。ただ一点、「おいしい」と言ったら怒られました。おいしい・おいしくないは、おまえの執着心だ、と。

いちばんつらかったのは、蚊です。虫除けが効かず、戒律のために、殺すこともできず、悩まされました。八十カ所以上、刺されました。このかゆさは本当に厳しかったです。

さて、道場の主はミャンマーには数人しかいないという偉いお坊さんでした。

この高僧と毎日仏教について語り合いました。この対話のおかげで、日本の大乗仏

教と上座部仏教とではこんなにも違うのかと実感するいい機会となりました。

お釈迦さまの教え一つひとつは、だいたい同じ理解なのですが、目指しているものが違うのです。私は、仏教は仏になることを目指すものだと理解していましたが、「あなた、何を言っているのですか」と言われてしまいました。上座部仏教は、涅槃（ねはん）を目指しているというのです。同じじゃないかと思いましたが、向こうでいう涅槃とは、苦しみも何もない無の世界、物質的にも精神的にも何もない世界とのこと。

大乗仏教はどうかというと、仏になる（悟りを開く）ことを目的とします。そして、すべての人が救われる世界を目指します。ところが、ミャンマーでは、修行をしたお坊さんのみが涅槃に到達できる。お坊さん以外の人は、次に生まれ変わってお坊さんになったときに修行をする。ミャンマー人は輪廻転生（りんねてんしょう）（生まれ変わり）を強く信じています。今の日本人にはなかなか持ち得ない感覚かもしれません。

お坊さんにならないと涅槃に到達できない上座部仏教と、お坊さんと一般の方両方が救われるという大乗仏教。どちらが正しいということはありません。ただ私には、大乗仏教でしか生きられないということ、念仏でしか救われないということは、はっきりしています。戒律を守れない自分が救われる道は一つしかないと確認できました。

また、自分だけではなく、まわりのみんなと一緒に救われていこうという考え方のほうが、私の性には合っています。なので、これからも皆さんの幸せを目指していきます。

エピローグ

私の挑戦

経験に固執せず、
つねに目的に立ち返り、
柔軟に変化せよ。

ひと昔前は、教授が板書をしながら講義をし、学生がそれを一所懸命にノートに写し、授業についてこれない学生がいると、それは勉強の足りない学生側のせいだと言えました。しかし、大学が全入時代に入った今では、もう通じません。学生のレベルにあわせて教えなければ大学の教育は成り立たない時代となったのです。

大学の使命は、「教育」「研究」「社会貢献」と言われます。しかし一般論として大学教員は研究については放っておいても熱心にやるけれど、教育はともすると、手薄になりがちです。

ほとんどの私立大学において、その収入の大部分は学納金です。そして大多数の保護者の方は、「うちの子どもを教育して、就職させてほしい」と考えて学費を納めてくださっているでしょう。であるなら教育に力を注ぐのは大学としての使命です。幸い本学には、教育に情熱を注いでくれる教員がたくさんいます。

これまでの経験に固執せず、学生のためにどうすればよいか、つねに目的に返り、柔軟に変化できることは、これからの時代を生きていくうえで不可欠といえます。

自分の頭で考えて、判断し、行動せよ。

私は、埼玉工業大学の一年生を対象に、「仏教精神」という講義を通年で担当しています。と言うと、何か仏教の教義や歴史を学ぶイメージを待つかも知れませんが、テーマは、「利他精神」です。

仏教の目指すものは自利と利他です。自利とは、自身の修行の完成、利他とは他者を救うことです。特に、利他の心を学生の皆さんに身につけてもらいたいとの願いを持って、この講義を行っています。

仏教に限らず、他の宗教でも利他精神と同様のことが説かれています。ゆえに、講義では、仏教以外の宗教者の話や、歴史上の偉人などの話も交えて、皆さんに考えてもらいます。ポイントは、自分で考えること。教員から話を聞くだけでは良い学びにはなりません。「なぜ、この人はこういう生き方を選んだのか?」「この教えの根底にあるものは何か?」そんなことを推し量りながら、自分でしっかりと考え、利他精神の大切さに気づいてもらえたらと願っています。

そして、自分で考えて、その大切さが分かったなら、それに基づいた行動ができるようになってもらいたいのです。

自分が欲するところではなく、
相手の欲するところを探せ。

理事長就任後、深谷市内の小学校・中学校、全二十九校にごあいさつに伺いました。地域貢献に積極的に取り組み、地元から必要とされ、愛される大学に変えていきたかったからです。校長先生方に、学習ボランティア、クラブ指導の補助などぜひお手伝いをさせてください、と働きかけました。当初は、ほとんど声がかかりませんでしたが、最近は、学習ボランティアを手伝ってくれる学生さんを捜すのが大変になるほど、多くの学校から依頼が来ています。手伝いに行く学生さんたちの反応も上々です。自分自身の基礎学力を見直す良い機会になり、また小学生・中学生から頼りにされ、感謝されることが嬉しいようです。

企業にも営業活動に行きます。「大学は敷居が高くて、近寄りがたい」ということを良く言われましたが、最近は聞かなくなりました。企業と本学の教員との共同研究なども進んでいます。

また、先方からこちらに要望はないか、いつも聞いてまわり、どういう大学であってもらいたいか、を教えていただいています。教育機関として、変わらない根幹はあっても、時代のニーズにマッチした大学であり続けたいと思っています。

手間を惜しまない

できると思ってやれば、できる。
できないと思ってやれば、できない。

長野県坂城（さかき）町のお寺の住職さんとの話がきっかけで、新しい取り組みが始まりました。町内には優良な中小企業がいっぱいあるのに、東京の大学に行った子たちは地元に戻ってこない、とおっしゃるので、だったら、東京の手前、埼玉県深谷市の埼玉工業大学でがっちり受けとめて、四年後、地元に学生が戻れるようなサイクルを一緒につくりましょう、と発案したのです。それから三年間、毎月のように坂城町へ通いました。企業の経営者の方や役場の方々、町長さんのところにも伺い、趣旨説明を繰り返しました。坂城テクノセンターで行われている研修会、懇親会にも頻繁に足を運び、大学の名前を憶えてもらい、徐々に親しくなり、平成二十二年（二〇一〇）二月、ようやく坂城町、坂城テクノセンターそして坂城高等学校と協定を結ぶまでに至りました。しかしこれはスタート地点です。現在は、テクノセンターでの技術交流会に教員を派遣したり、坂城高校での出前授業なども実施しています。そして坂城高校から入学してきた学生が学んでいます。これから、その成果が試されます。

新しいものを生みだすには、たいへんな時間と労力が必要です。失敗する可能性もあります。しかし、できると思ってやれば大抵のことはできると思うのです。

日本一の後援会

陰（かげ）ながら応援してくれる存在、それが両親だ。

本学には後援会があり、学生の保護者の方によって組織されています。歴代の会長さんはじめ役員の皆さんが献身的に活動してくださり、学生そして大学のために力を発揮していただいています。

学園祭での模擬店では、数ある学生たちの模擬店を抑え、毎年売り上げナンバーワン。深谷市のマラソン大会では、大勢の方がレースに参加し、かつ大学のブースで温かい飲み物を提供するボランティアなどで活躍。また、経済的な理由で就学の継続が困難な学生に対する支援なども行っています。夏の宗教研修合宿では、自分の子どもと同年代の学生を捕まえて、懇親会では大いに盛り上がるなど、学生に混じって、学生に負けないくらい後援会としての活動を楽しんでいただいているようです。大学は学生が学び、大学生活をエンジョイする場ですが、スポンサーである親御さんにもぜひ楽しんでいただきたいと思っています。

ご両親は皆、君たちのことを真剣に応援してくれています。そのことを片時も忘れることなく、期待に応えるように頑張ってください。

学生プロジェクト

信じて任せてみる。すると自ら動きだす。

「学生たちの主体性・創造性の向上をはかるべく、通常の授業やクラブ活動とは違った学生プロジェクトを立ち上げたいが、どう思うか？」という私の質問に、多くの教職員の答えは、否定的なものでした。でも、とりあえずやってみよう、と平成二十年（二〇〇八）から「がんばる！学生プロジェクト」を立ち上げました。手を挙げてきた学生のグループにプレゼンを実施してもらい、審査が通れば、予算をつけます。平成二十九年一月現在で、動いているプロジェクトは十件。そのうちの二件を紹介します。

「集まれ科学実験教室プロジェクト」では、近隣の小中学校や児童館へ出張し、実験を通して、科学の不思議、面白さを知ってもらう活動をしています。最近は依頼が多く入りすぎて嬉しい悲鳴を上げている状況です。

「ＯＫＡＢＥ光の回廊プロジェクト」は、毎年、冬の時期、高崎線岡部駅前のイルミネーションを地元商工会青年部と共同で制作し、地域の皆さんに楽しんでいただいています。

学生は自分たちでは何もできない？　それは間違いです。信じて、任せてみれば、立派にやってのけます。われわれはそういう学生を、これからも応援していきます。

想いに応える

続けることに意義がある。

平成二十三年三月十一日、東日本大震災が発生し、東北地方に未曾有の被害をもたらしました。その日、大学で仕事をしていた私は、ＪＲの電車が運行停止になったため、大学構内で一晩を過ごしました。広いロビーで、毛布にくるまり、同じように帰宅できなかった学生たちとともにテレビの画面に釘付けになりながら。すべてを押し流してしまう津波、その後の大規模火災、震源地から離れた東京湾でのコンビナート火災……。情報が入るにつれ、被害の大きさに言葉を失いました。

あれから六年、その被災地で今も、私たちは復興支援活動を行っています。その名も、「東北再生　私大ネット３６（サンリク）」。日本の私立大学二十数校が結集し、宮城県南三陸町を主な活動拠点として、大学の垣根を越えて学生たちが活動にいそしんでいます。当初は、がれきの撤去が中心だったのが、現在は、水産加工業や農業のお手伝い、地域のコミュニティ作りなどを通して復興に寄与する形に変わってきています。

被災地の方々は、若い人に足を運んでもらえるだけで町が元気になる、と温かく迎え入れてくれます。その言葉に甘えずに、若い学生達の斬新なアイディアで、町の復興をお手伝いできればと願っています。

◆ 自分が変わる物語が始まる ◆

埼玉工業大学のルーツは、明治三十六年（一九〇三）に東京浅草の森下町に設立された東京商工学校という学校です。そこから数えて、学園創立百十周年を迎えた年に、大学のブランディングに取り組みました。

これから埼玉工業大学はどういう方向を目指していくのか？　といった議論を重ねて、「スローガン」と「埼工大宣言」を制定しました。

スローガン

《自分が変わる物語が始まる》

埼玉工業大学が提供する価値をひと言で表したメッセージです。

埼玉工業大学は、自分を変えたいと思っている学生たちの、最高の物語づくりを全面的にサポートします。

埼工大宣言

be Social　広く「社会」に目を向けよう。
be Aggressive　何事にも「積極的」な姿勢で臨もう。
be Imaginative　豊かな「独創力」を培おう。
be Kind　常に「思いやり」の心を持とう。
be Original　自らの「個性」を磨こう。

建学の精神、教育方針の実践に繋がる、学生と教職員が共有する行動指針として制定しました。

学ぶということは、自分自身をより良い方向に変化させることだ、と私は確信しています。埼工大宣言を実践し、日々のさまざまな学びを通して、自分を変えていく。そのことによって自分に新しい物語の一ページが始まっていくことを期待しています。

あとがき

滅多に風邪を引くことがない私が、ちょっと熱があるな、と感じ、医者に行ったところ、インフルエンザA型と診断され、五日間の外部との接触を禁止されました。「これから高熱が出る」と医者には脅されましたが、昨年暮れから腰痛で悩まされており、その痛み止めの薬の解熱作用が効いた模様。熱はさほど上がらなかったため、苦しまずにすんでいます。これも幸運のひとつでしょうか。これほどまとまった時間、だれにも邪魔されずに使うことができるのは、初めてのこと。この貴重な時間を使い、今、あとがきを書いています。

そもそもなぜこの本を書くことになったのか。降って湧いたような話です。

父もだいぶ歳を取り、衰えを感じてきたときに、その足跡を一冊の本に残してはどうか、という申し出を受けました。本人もやるというので、話を進めていたところ、父が急に「やらない」と言いだしたのです。そこで出版社が出してきたのが、代わりに全く別の本を、私が書く、という提案でした。

いつか本を書いてみたいという気持ちはありましたが、それが今ではないことは、はっきりしていました。日々の学校の業務とお寺の法務を思うと、空いている時間はほぼありません。が、やると決めた以上はやる。「忙しいという字は、心が亡くなる、と書く。そこに心がないという意味だ」とつねに人に言っている自分が、そんな言い訳はできません。

そして、始まってから分かりました。本を書くというのは、本当に大変な作業なのだということを。

私がこの本のなかで伝えたかったこと。それは、「私のような凡夫でも、自分を変えて強くなることができる。つまりだれでも変わることができる。しかし、それは自

分で決意し、行動しないことには始まらない」ということです。学園の理事長に就任し、まもなく丸五年を迎えようとしています。私は、この五年で、今までの人生でいちばん成長したと言えます。

「凡夫（ぼんぶ）」とは、仏道修行に未熟な人のこと。特に浄土教においては、お釈迦さまが亡くなって以降、この世に生まれてきたすべての人のことを指します。この「凡夫」を自覚することこそが、自分を向上させよう、まわりの人たちを幸せにしよう、という原動力になると、私は強く信じています。

このことを抹香（まっこう）臭くなく、若い人たちに伝えたいと考えました。そして、日ごろ、私が、学生生徒、教職員、そして寺の檀信徒の皆さんの前で話していることを中心に、新たな内容を加え、文章に起こしました。当初の目的にどれだけ近づけたか分かりませんが、今の私には、これが限界です。

出版にあたり、自分自身が、仏教および浄土宗の教えを正しく理解しているか、も

う一度確認する必要があると思い、宇治平等院ご住職・神居文彰師よりご教示を賜わりました。深く感謝の意を表します。

また、なかなか執筆の進まない私を叱咤激励し、書き上げた原稿に辛口の批評を加えてくださった良本和惠さんにも深く謝意を表します。

こいねがわくば、一度この本をご高覧いただいた後は、ダメな自分を深く壁底に埋めて、新しい自分を窓からのぞかせてください。恐れることなく、自らの殻を破る人が、新しい自分の道に達することを願っています。

平成二十四年二月

松川　聖業

新装改訂版に寄せて

『凡夫力』も初版発刊から五年経ちましたが、その間に学園を取り巻く社会環境は大きく変わり、私自身の周りにもいくつかの変化がありました。その一つが、父が浄土に旅立ったこと。先日、遺品を整理していたところ、私の生まれたときに父が書き記したメモが見つかりました。抜粋してご紹介いたします。

汝の生誕は不可思議の因縁和合による不可思議の業を受く。何万年のつながりをもつ、その肉体も精神も、そしてそこから出ずる思考も行動も、皆、この日を自然、日本の文化、そしてもっとも強くは、松川家の有縁のものの中から培われたものであることを明記せよ。

それに執（執着見）するなかれ、それを断（断滅見）ずるなかれ。

自己の業を凝視せよ。正しく把握せよ。そこから正行が生まれるであろう。苦しみを厭うな。悲しみにうろたえるな。人生は皆苦だ。自己の業を知ったとき「自己の生殺与奪」が一自己にあることを知るだろう。大きく生きよ。雄々しく生きよ。汝の行動の全てが、汝が他に与え、後に残す業となることを識って信（知恵それを識るを信となす）深き人となれ。

他人と同じことしか出来ぬ者には、他の上に立つことが出来ないだろう。何でも良い。他人の出来ないことをやり遂げた経験をもて。実力と実行力と人間的魅力をもって権威者となれ。

「業」とは、人間の行為のこと、また前世の行為が原因となり現世で受ける結果のこと。己の業を自覚することの大切さと共に、非常に厳しい生き方を示した言葉です。そして今、私が追い求めていることと非常に近いものであることに驚きを感じています。これも父の子であるという「業」なのでしょうか。

今回、五年前に執筆したものに加筆修正を加えて、再版することにしました。

われわれはすべて、親から生まれてきています。親は子に対して無限の愛と責任をもっています。そして、すべての親は、わが子の幸せを願っています。自分が親となった今だから分かります。

この本を手に取ってくれた若者が、一人でも多く、実力と実行力と人間的魅力をもった権威者（特定の分野で深い造詣をもち人々の尊敬を集めるもの）となり、幸せな人生を歩んでくれることを心から期待しています。

平成二十九年二月

松川　聖業

本書は、平成二十四年三月刊『凡夫力』（ＭＯＫＵ出版刊）に修正を加え、新装にして再発行したものである。

松川聖業（まつかわ・せいごう）

昭和 45 年(1970)東京都生まれ。平成 6 年 3 月日本大学法学部経営法学科卒業。同年 10 月より浄土宗智香寺住職。平成 19 年 4 月より学校法人智香寺学園埼玉工業大学・正智深谷高等学校理事長。

新装改訂版　凡夫力（ぼんぶりよく）　社会へ飛び立つ君に伝えたいこと

平成 29 年 3 月 17 日　初版発行
令和 4 年 3 月 1 日　3 刷発行

著者　松川聖業（まつかわせいごう）

装画　二木ちかこ
装丁　浦谷さおり

発行人　良本光明
発行　株式会社グッドブックス
〒 103-0023　東京都中央区日本橋本町 2-3-6 協同ビル 602
電話 03-6262-5422　FAX 03-6262-5423
ホームページ https://good-books.co.jp

印刷製本　シナノ印刷株式会社

© Seigo Matsukawa,2017 Printed in Japan　ISBN 978-4-907461-11-9 C0030
乱丁・落丁本はお取り替えいたします。価格はカバーに表示してあります。
本書の無断複写（コピー）は、著作権法上の例外を除き、禁じられています。